拠　点　校　の　事　業　実　施　報　告　書

拠点校名：津山市立鶴山小学校

１　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

月	日	曜日	時　刻	内　　容	
4	2	水	14：50～15：40	研究推進委員会	研究の方針と計画（話合い）
	10	木	16：00～16：50	研究推進委員会	研究の方針と計画（検討）
	14	月	15：30～16：50	全体研修	研究の方針と計画（提案）
5	7	水	14：50～15：40	学年団会	各学年の取組について
	14	水	14：50～15：40	学年団会	各学年の取組について
	19	月	16：00～16：50	学年団会	各学年の取組について
	21	水	14：50～15：40	部会	各学年の取組について（まとめ）
6	2	月	16：00～16：50	部会	各学年の取組について（まとめ）
	9	月	16：00～16：50	学年団会	英語教材研究など
	11	水	14：50～15：40	学年団会	英語教材研究など
	16	月	16：00～16：50	全体研修	10/31について　各部会からの報告
	20	金	11：35～12：20	授業公開	３年１組　英語活動授業公開
	23	月	13：50～16：50	研究授業 全体研修	６年２組　英語活動研究授業 助言者　岡山県教育庁指導課 西田　寛子先生 津山市教育委員会学校教育課 小林　圓裕先生
	25	水	13：50～16：00	授業公開参加	林田小英語科授業公開
	26	木	13：15～16：00	授業公開参加	中道中英語科授業公開
	27	金	9：30～10：15	授業公開	２年1組　英語活動授業公開
7	1	火	11：35～12：20	授業公開	４年３組　英語活動授業公開
	2	水	13：25～16：00	授業公開参加	高倉小英語科授業公開
	3	木	11：35～12：20	授業公開	５年２組　国際交流授業公開
	11	金	8：40～ 9：25	授業公開	１年１組　英語活動授業公開
	30	水	9：00～12：00	全体研修	１、２年英語活動授業 ビデオ参観及び研究協議
	30	水	13：30～16：30	全体研修	５、６年国際理解、英語活動授業 ビデオ参観及び研究協議
	31	木	9：00～11：00	学年団会	10/31に向けて指導案検討
8	5	火	13：30～16：30	全体研修	３、４年英語活動授業 ・ビデオ参観研究協議
	20	水	9：00～11：30	部会	研修会報告　部会
	20	水	13：30～15：30	部会	部会
	21	木	9：00～11：30	学年団会	学年団10／31に向けて（指導案等）
	21	木	13：30～15：30	学年団会	学年団10／31に向けて（指導案等）
	22	金	9：00～11：30	全体研修	紀要原稿検討

	25	月	9：00～11：30	全体研修	指導案検討（全体）紀要原稿検討
	26	火	13：30～16：30	全体研修	指導案検討（低・中・高）
	28	木	13：30～16：30	全体研修	紀要原稿検討
9	3	水	14：50～15：40	全体研修	紀要原稿検討
	8	月	15：30～16：50	学年団会	指導案検討（低・中・高）
	10	水	14：50～15：40	全体研修	紀要原稿検討
10	14	火	16：00～16：50	全体研修	指導案最終検討
	20	月	16：00～16：50	全体研修	紀要最終校正
	30	木			前日準備　打合せ
	31	金	12：50～16：50	研究発表会	助言者　岡山県教育庁指導課 西田　寛子先生 津山市教育委員会学校教育課 小林　圓裕先生 岡山県総合教育センター指導主事 信宮 誠先生
11	12	水	14：50～16：30	学年団会全体研修	研究会反省
1	7	水	13：30～15：00	部会	来年度の英語活動について・研究のまとめ
2	27	金	16：00～16：50	部会	来年度の英語活動について・研究のまとめ

2　本校における取組の具体的な内容

○　教員の指導力の向上のための取組について

・先進校の視察を行い、指導方法やカリキュラムの研修や資料の収集を行った。
・全学年の授業をＶＴＲに録画し、視聴しながら、話し合い、授業改善に努めた。
・昨年度本校でＡＬＴとともに作成したカリキュラムＣＤ音声版を全職員に配布して発音の研修をした。
・外部講師を招いて授業公開を行い、研究協議をおこなった。
・校内研修や研究によって、英語活動への共通認識を持ち、教職員の意欲を高めた。

○　効果的な指導方法の工夫改善について

・学年や児童に合わせてカリキュラムを見直し、作り直して授業をした。
・カリキュラムに合わせて、教材を作成したり、教室整備や英語環境を整えた。
・英語のコーディネーターを２名置き、ＡＬＴや担任との連絡調整や、カリキュラムの作成、変更を中心となって行った。
・担任とＡＬＴとの効果的なＴＴ指導について研究実践した。日案を担任とＡＬＴとに分けて書き、担任が授業を主導しやすいよう、工夫をした。
・英語の月の歌を決め、全校で朝の会や帰りの会に歌うことで、毎日英語に触れる時間を作った。

○　児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

・全校アンケートにより、児童がどのように感じながら英語活動に取り組んでいるのか、児童理解と考察を行った。また、昨年度のアンケート結果と比較検討し、同じ児童たちがどう変容したかを考察し、指導に生かした。

○　**ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について**

・ＡＬＴが週３回来校するので、英語であいさつしたり、分からないことが聞けたりでき、職員も児童も英語を使う機会が増えた。また、２年間学区に住む同じＡＬＴに指導してもらうことによって、ＡＬＴと児童とのつながりや、教職員との絆が生まれ、児童の性格や理解度を踏まえての指導ができてきた。

・地域の人材から、ＮＰＯ法人イングリッシュサイズを主催している福田聖子さんに、カリキュラムについてのアドバイスや校内研修でアクティビティの研修をしていただいた。

○　**その他（中学校との連携、ＩＣＴの効果的な活用等）**

・公開授業を中学校と互いに見合ったりカリキュラム作成や教材作成に中学校の先生も参加してもらったりして、互いに交流することができた。

・中学校では、生徒たちが、英語の音声に慣れ、抵抗なく中学校の英語学習に入ることができるようになり、「クラスルームイングリッシュ」「身の回りの英語」「アルファベット」などのスターティングレッスンにかける時間を削減できた。

・中学校１年の英語学習の効率が高まり、コミュニケーション中心の発展的な内容の学習活動に取り組ませることができた。

・パソコン、電子情報ボード、インターネット等を利用した教材開発や授業を行った。

３　本校における取組の成果等　（○成果　●課題）

○　授業をしながらカリキュラムを練り直し、中道中学校区の３小学校と中学校、ＡＬＴが協力して、日案やＣＤづくりができた。市内の全小学校や希望のあった学校に配布し、参考にしてもらった。

○　児童も教員も英語活動に慣れ、スムーズに誰でも授業ができるようになってきた。

○　研究発表会を行うことにより、２年間の研究過程や成果、課題を整理し、まとめ、校外に発信することができた。

○　年間を通じて同じＡＬＴに来校してもらうことによって、ＡＬＴが児童の名前はもちろん、一人ひとりの得意・不得意や性格をとらえることができ、児童とのコミュニケーションも向上し、指導の効果がより上がった。

●　どの学年も、英語活動のゲームやアクティビティを楽しみにしているが、学年が上がるにつれて話すことへの苦手意識が少しずつ増えてくることがアンケートにより分かった。

●　６年生から中学校へのつなぎをスムーズに行い、中学での英語嫌いをどう防いでいくか、中学校との連携をすすめるために一層のカリキュラムや授業の研究をすることが課題である。

●　５・６年生のスムーズな外国語活動の学習に入るためには、１～４年生の準備が必須であると考える。教育課程上１～４年生の時間をどう確保していくか検討したり、日常活動のなかで継続してできることを研究したい。

拠 点 校 の 事 業 実 施 報 告 書

拠　点　校　名：　玉野市立宇野小学校

1　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

月　日	内　　容
4月 2日	研究推進委員会：本年度指導内容の検討・打合せ①
4月 8日	研究推進委員会：本年度指導内容の検討・打合せ②
4月18日	校内研修　　：本年度指導内容の確認・共通理解
4月21日	校内研修　　：本年度指導内容の確認・共通理解
5月 8日	授業実践「自己紹介をしよう」（5年・6年）
5月15日 5月22日 5月29日 6月 3日 6月 9日 6月11日 6月12日	英語集会に向けた授業実践「英語集会をしよう」 ・日本の伝統行事（5年） ・ぐりとぐらのえんそく（6年）
6月17日	英語集会予行
6月19日	英語集会に向けた授業実践「英語集会をしよう」 ・日本の伝統行事（5年） ・ぐりとぐらのえんそく（6年）
6月20日	英語集会開催
6月26日	英語集会を振り返って（5年・6年）
7月 3日	授業実践「スクールウォッチング」（5年） 授業実践「世界の国のあいさつ　国名・国旗」（6年）
7月 8日	小学校における英語活動等国際理解活動推進協議会参加
7月10日	授業実践「スクールウォッチング」（5年） 授業実践「世界の国のあいさつ　国名・国旗」（6年）
7月17日	授業実践「世界の国のあいさつ　国名・国旗」（6年）
8月	４月～７月の実践のまとめ ９月以降の英語活動の教材研究 資料整理
9月 4日 9月18日 9月25日	授業実践「自分の好きな服を着よう」（5年） 授業実践「もしもし　あのね」　　（6年）
10月 2日 10月 9日 10月16日 10月23日	授業実践「世界のファッション　ワークショップ」（5年） 授業実践「外国の人にインタビューをしよう」　　（6年）
10月30日	授業実践「世界のファッション　ワークショップ」（5年）

11月 6日 11月13日	授業実践「大人の自分は何をしているかな（職業)」(5年) 授業実践「道案内をしよう」　(6年)
11月20日	授業実践「大人の自分は何をしているかな（職業)」(5年)
11月27日	授業実践「大人の自分は何をしているかな（職業)」(5年) 授業実践「道案内をしよう」　(6年)
12月 4日	市内公開授業（第５学年） テーマ：「大人の自分は何をしているかな（職業)」 研究協議会
12月11日	授業実践「自己紹介をしよう」(5年・6年)　※ALT交代のため
12月18日	授業実践「メリークリスマス」(5年・6年)
1月15日	授業実践「友達紹介クイズ大会をしよう」(5年) 授業実践「世界の祭り」　(6年)
1月22日	英活参観日：テーマ「友達紹介クイズ大会をしよう」(5年)
1月29日 2月 5日	授業実践「友達紹介クイズ大会をしよう」(5年) 授業実践「ワールドフェスティバル」　(6年)
2月12日	授業実践「世界の食べ物」(5年) 授業実践「将来の夢」　(6年)
2月17日	授業実践「Good byeパーティをしよう」(5年・6年) ※ALT派遣の最終日
2月19日	授業実践「外国の人と交流しよう」(6年)
3月 4日 3月11日	授業実践「世界の食べ物」(5年) 授業実践「将来の夢」　(6年)
3月	研究推進委員会：本年度の研究成果と課題について 来年度の研究について

２　本校における取組の具体的な内容

○　教員の指導力の向上のための取組について

昨年度に続き，本年度も指導の重点の一つとして「英語表現に慣れ親しみ，外国の文化に興味や関心をもち，進んでコミュニケーションを図ろうとする子ども」の育成をめざして次のようなことに取り組み，指導力の向上に努めた。

・月末のコミュニケーション活動を振り返り，反省を次回の活動に生かした。
・５月と２月に英語活動参観日を設け,その日を市内公立学校教員にも公開することにより,広く指導を仰ぐとともに，地域教員の指導力の向上にも寄与した。
・12月に市内公開授業を開催し，地域教員の指導力の向上を図るとともに，研究協議を通して英語活動の具体的な指導法や英語ノートの活用について研修を行った。

○　効果的な指導方法の工夫改善について

・英語ノートの導入に伴い，５年前から行っている本校の英語活動の１単位時間の活動の流れを，各月のテーマに合わせて英語ノートが効果的に活用できるよう見直しを図った。
・より主体的にコミュニケーション活動ができるように「フレンズカード」(交流した友達を確認するためのカード)の形式を改善した。
・学習活動に適した教材教具を開発・作成し，教員全員が共有でき，手軽に利用できるような保存法を工夫した。

○　児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

・授業中に「ALTのTiny Talkへの関心」「発音練習における音声」「交流ゲームにおける積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や基本的な会話表現」について評価を行った。

・ふりかえりカードを集計することにより，個々の実態の把握をした。

○　ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について

・今年度も昨年度に引き続き，本事業のために高学年に派遣されたALTに，英単語や基本的な会話表現の発音等の指導だけでなく，ALTの母国を中心に国による生活習慣や文化の違い等を理解する学習活動にも積極的に関わってもらった。

○　その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）

・12月に開催した市内公開授業に中学校の教諭の参加もあり，小中連携に関する有益な話し合いがもたれた。具体的には，次のようなことが話題となった。

①英語が楽しいという気持ちで卒業させてほしい。

②中学校からは「書く」活動が多くなるので，小学校の楽しい英語活動とのギャップを埋めることが大変である。
中学校でも楽しい小学校の英語活動を取り入れる工夫をしたい。

③小学校によって英語活動の取組が違うので，せめて同じ中学校区ぐらいでは足並みがそろうことが望ましい。

④小学校のころから英語の音声に慣れておくのは効果的である。文字ではなく，リズムで英語を捉えることができる。

⑤小学校でしっかりローマ字を覚えてきてほしい。

3　本校における取組の成果等

本年度は年度がスタートしてから英語ノートが届けられたため，英語ノートの効果的な活用方法については試行錯誤しながらの１年間であった。しかし，本校の年間活動計画に取り入れることができる単元は，できる限り活用することを心がけた。そのため，以前は，short（20分程度）の練習を積み重ね，それを使って月末に45分の英語活動を実施していたが，５・６年生はshortを中止し，週１回定期的に45分ずつの活動を行うように変更した。開始当初は，毎週の活動案を作成していたが，現在では，１ヶ月間を見越した形式を考え，それに沿って進めていくように変更したため，時間的な負担が軽減された。また，来年度に向けてより積極的に英語ノートを活用することができるように，５・６年生の年間活動計画の見直しも行った。

市内公開授業では，平成23年度から高学年で外国語活動を実施することが決定したこともあって非常に多くの参加者があり，指導方法や教材教具の準備や活用の仕方，ALTやゲストティーチャーの効果的な活用法や募集の仕方などについて活発な話合いの機会をもつことができた。

拠　点　校　の　事　業　実　施　報　告　書

拠　点　校　名：総社市立昭和小学校

1　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

４月　　研究計画の見直し，教材研究
５月１４日　市内公開の授業研究会の開催：５年（講師）
６月１２日　市内公開の授業研究会の開催：３年（講師，市教委）
６月２７日　市内公開の授業研究会の開催：４年（講師）
７月１０日　市内公開の授業研究会の開催：知的特別支援学級（市教委）
７月３０日　校内職員研修（指導法の研究）：講師
８月２０日　校内職員研修（指導法の研究）：講師
１０月　９日　市内公開の授業研究会の開催：６年（講師，県教委，市教委）
１１月　６日　市内公開の授業研究会の開催：１年（講師）
１１月２１日　市内公開の授業研究会の開催：２年（市教委）
１２月１２日　市内公開の授業研究会の開催：情緒特別支援学級（市教委）
１月　　年間計画等の見直し
２月　　研究のまとめ

2　本校における取組の具体的な内容

○　教員の指導力の向上のための取組について

・　昨年度に引き続き，指導用図書やＣＤ・ＤＶＤ教材を購入した。今年度は，より効果的で授業に使えるチャンツ・歌・ゲームの収集と指導法を中心に全教職員で研修を行った。
・　教材研究と授業研究を行い指導法の研究を行った。大学教授を講師として招聘し，実践的な指導法や理論，また，英語ノートの活用や今後の英語活動の動向についての研修もした。全学級英語活動に取り組むこととし，講師を招聘して指導を受けるとともに，市内小学校教員や中学校英語科教員の参加を得て研究協議を行い，指導力の向上を図った。
・　先進校視察や研究発表会・研修会・セミナー等の参加を計画的に行った。

○　効果的な指導方法の工夫改善について

・　研究仮説を「英語活動において，指導と評価を工夫することにより，聞きたい話したいという気持ちを喚起し，英語を使って伝え合う楽しさを経験させれば，コミュニケーションを図ろうとする意欲や態度が育つであろう。」と設定し，「場面設定の工夫」「教材・教具の工夫」「アクティビティの工夫」「評価の工夫」の４つの視点から研究に取り組み，指導方法を工夫改善した。特に本年度は，「アクティビティの工夫」と「評価の工夫」の研究に重点をおいた。

＜アクティビティの工夫＞

指導内容に合った，児童が楽しめるような遊びやゲームを選んで指導することにより，児童は英語表現を使って会話したり，伝え合ったりする楽しさを経験することができた。

低学年では，勝敗にこだわりすぎてはっきりと英語を言うことができなくなったので，対話中心にしてみたが，児童は十分楽しんでいた。勝敗があるゲームではなく，友達とのコミュニケーションを楽しめるものが英語活動にふさわしい。高学年では，楽しいだけのゲームではなく，思考を伴うゲームをすると意欲が増した。また，参観者や ALT，JTE とのアクティビティは，児童の実態に合わせた支援ができるため，児童も安心して取り組むことができる。

＜評価の工夫＞

指導目標と評価規準を明らかにしたことで，教師は，指導内容や評価方法を工夫しやすくなり，児童のよいところを認め，称揚することができた。担任と ALT，JTE とのデモンストレーションと授業終了後にする児童と１対１での会話の内容を関連させるようにした。その１対１での会話を本時の評価とした。また，授業時間内に一人ずつ発表する機会をできるだけ低学年ではとったので，評価したことをもとに称揚したり，つまずきに気づき時間内に指導したりすることができ，児童の英語活動への関心・意欲を高めることができた。

○　ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について

・　全学級，担任主導の指導形態を取り，ＡＬＴとのティームティーチングと学級担任単独での授業を隔週で行った。ＡＬＴとのティームティーチングの場合は，事前に打ち合わを行ってアイデアを出し合い，ＡＬＴとの役割分担を決めて授業を行った。
・　場面設定をデモンストレーションする場合には，担任とＡＬＴやＪＴＥとのＴＴでの役割演技が効果的で，英語表現を使用する場面を児童が理解しやすく，興味・関心が高まり，学習意欲を喚起することができた。また，復習や練習ではＡＬＴの口元を

みたり，ＡＬＴの後から繰り返し発音したりすることで正しい発音が自然と身についてきた。

・ 地域人材の活用としては，読み聞かせボランティアの方に月３回～４回児童への読み聞かせを行ってもらっている。その中で，英語が堪能な方に特別支援学級の児童の興味関心に合わせて，英語の絵本の読み聞かせやゲームなどを継続的に行ってもらった。手作りの小道具を用意するなど積極的な取り組みをしてくださった。

○ 児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

・ 今年度，「評価の工夫」を指導の重点に置いたため，授業のどの場面でどのような評価をしたらよいのかが分かり，指導に生かすことができた。それにより，児童の英語活動への関心・意欲を高めることができた。高学年では「振り返りカード」により児童の学習状況の把握もした。

・ 本校独自にアンケートを作成し，７月，１１月の年２回実施した。今後も継続して実施し，学習状況の変容を把握したい。

○ その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）

・ 市教委より小中連携校に指定され，学区の中学校英語科教員が本校との兼務になっているため，本年度も月に３回程度勤務している。打合せの時間は十分とりにくいが，担任が授業の流れなどを書いたメモを用意し，短い時間で効率よく話し合えるよう工夫した。こうして小学校での英語教育の様子を知ってもらい，中学校での英語教育がスムーズに行えるようにした。また，小学校の教員は中学校英語科の授業参観を行い，中学校での英語教育の様子を知るとともに，中学校英語科教員の専門性を学びながら中学校との連携を行った。

＜中学校外国語科教員感想＞

小学校英語活動に携わり，とにかく英語を話してみること，躊躇せずに大きな声で話しかけてみることの大切さを直に感じた。今年，小学校で英語を学んだ児童が中学校に入学した。英語の授業では，文法や英文の意味に少々とまどう場面も見られるが，何より大きな声で教師の後について発音し，コミュニケーションを図る時間には恥ずかしがらずに英語を話す生徒の姿があった。簡単なクラスルームイングリッシュは小学校で慣れているため説明の必要はなく，ALT の話したことの意味を考え，積極的にそれを知ろうとしている姿も印象的だった。

・ 指導に必要なフラッシュカードを英語ノート用のＣＤやデジタルコンテンツから印刷し，ラミネートして活用した。デジタルコンテンツにない物はコンピュータのお絵かきソフトやプレゼンテーション用ソフトを使って作成した。英語の歌やチャンツ，英語での読み聞かせの指導では，ＣＤをＣＤプレーヤーで再生したり，ＤＶＤをテレビに再生したりして活用した。コンピュータでデジタルコンテンツを作成し，プロジェクターと電子情報ボードで活用した。岡山県総合教育センターのホームページ上で配信されているデジタルコンテンツをコンピュータで活用したり，他のインターネット上で配信されているデジタルコンテンツも活用した。

３ 本校における取組の成果等

○ 教員の指導力の向上について

・ 学級担任主導で週１回行うようにし，研究を積んでいくうちに，教員の指導力が飛躍的に向上し，学級担任１人でも授業が行えるようになり，自信を持って授業が行えるようになってきた。しかし，職員の異動もあったので，５月の研究授業で今年度の指導の重点や授業の流れ等についての共通理解を図った。また，昨年度に引き続き，大学の先生を講師として教師の指導力アップをめざして研修を積んだ。授業研究や研修を積み，全ての担任が，指導力がアップしたと回答した。

○ 児童の興味・関心等学習状況の変容について （%）

	英語の時間が楽しみ		英語の時間が好き	
	７月	１１月	７月	１１月
１ 年	９２	１００	９２	１００
２ 年	１００	１００	１００	１００
３ 年	１００	１００	１００	９３
４ 年	９０	９５	９０	１００
５ 年	９１	９５	９１	９６
６ 年	８７	７４	８３	１００

実施したアンケート調査の結果から，児童の英語活動への興味・関心が高いと言える。しかし，内容が難しくなる高学年になるにしたがって数値が下がってきているのが残念だ。

６年生は，修学旅行先で，「外国の人とコミュニケーションをとり，サインをもらってこよう」という目標を立て，全員が実践できた。農村地帯の小さな学校の児童であるが，臆せず，コミュニケーションをとれたことは，大きな成果であると思う。

○　保護者の意識の変容について

今年度は，保護者へ全学年の授業内容等を紹介した学校便りを発行し，感想をもらうという形でのアンケート調査を行った。次のような意見・感想があった。（複数回答）

①　英語活動を楽しんでいる（１５）

②　コミュニケーション能力を高めるためにいろいろな工夫をしている（１２）
　文字でなく，聞く・話すこと（耳から聞くこと）を中心に英語活動をすることに賛成

③　家でも，英語の歌を歌っている・英語の話をする・英語で質問（６）

④　ＡＬＴとの英語のやりとりを楽しみにしている（３）

⑤　中学校への移行がスムーズにできそうだ（３）

⑥　子ども達の発音がよい（２）

⑦　どの学年も異なった表現（課題）を学んでいた（２）

⑧　修学旅行で日頃の成果が役に立って，外国の人とコミュニケーションがとれた
　英語を話してみるという度胸が付く（２）

⑨　英語教育の専門性をもたない教員が指導することに反対だ

⑩　日本語も大切にしていってほしい

拠　点　校　の　事　業　実　施　報　告　書

拠　点　校　名：　備前市立伊里小学校

1　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

月	内　　容
４月～　５月	・ＡＬＴとの打合せ ・事業実施の方向付けと確認 ・前年度までの英語活動の取組についての確認と検討
６月～　７月	・ＡＬＴとの授業実践 ・教材の開発についての研修 ・ＩＣＴ活用についての研修 ・児童対象の実態調査の実施
８月	・先進校視察による研修，及び資料収集（熊本県熊本大学附属小学校） ・教材の開発についての研修 ・ＩＣＴ活用についての研修 ・年間指導計画の立案にかかわる研修
９月～１月	・ＡＬＴとの授業実践 ・ＩＣＴを活用した授業実践 ・教材教具の作成 ・指導法の研修 ・年間指導計画の立案と検討 ・英語活動教室の環境整備 ・児童対象の実態調査の実施 ・研究集録の作成 ・先進校視察による研修，及び資料収集（岡山県美作市立英田小学校）
２月	・ＡＬＴとの授業実践 ・小学校英語活動研究発表会の開催 （講師　岡山大学大学院教育研究科教授　髙塚成信先生）
３月	・二年次のまとめ ・来年度の取組への方向付け

2　本校における取組の具体的な内容

(1)　教員の指導力の向上のための取組について

英語活動にかかわる第５，６学年担任が先進校視察を行い，理論的な研修を行うとともに，授業実践に生かすことのできる具体的な指導法についての研修を行った。

また，日々の授業実践における成果や課題について，教員同士が協議できる場を頻繁に設定した。その中で出された改善点を次の授業場面では積極的に取り入れていくように指導計画の改善を図った。

(2)　効果的な指導方法の工夫改善について

指導計画の立案にあたっては，第２年次の年間指導計画（３５時間分）を作成した。授業担当の２名が共通の取組を行うことができるように，ＨＲＴとＡＬＴの動きが具体的に明記された学習指導案を作成した。

１単元を３時間で構成する方法を開発し，すべての児童が英語活動に対して積極的に取り組むとともに自信や達成感のもてるような指導方法の改善を行った。

３時間の授業展開を定型化する方向での工夫を行い，児童が授業展開の見通しをもって活動に集中できるような指導計画を立案した。

体験的活動の充実を図り，ダイアローグの効果的な習得という観点でアクティビティやゲームを選択し，様々なダイアローグで応用可能な体験的活動を明らかにした。

(3)　児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

英語活動にかかわる児童の意識の変容を把握するために，年間２回，実態調査を行った。以後の取組に生かすことができるように記述式の項目も取り入れ，幅広い調査項目を設定した。調査結果は教員が集計分析を行い, これまでの取組について反省するとともに今後の課題を明確にし，さらなる指導法の工夫を重ねていくことにした。

(4)　ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について

第５学年では全授業をＡＬＴとのＴＴで行い，ＨＲＴがＴ１，ＡＬＴがＴ２を担当した。第６学年では１単元３時間のうち１時間だけはＨＲＴが単独で実施した。

児童が本時の課題を明確につかむことができるようにＨＲＴとＡＬＴが連携を図り，ダイアローグ活用の状況設定を寸劇風に行った。また，授業の導入では，フリートークタイムを設定し，ＡＬＴと既習の単語やダイアローグを活用して自由に対話することのできる場を設定した。

(5)　その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）

中学校の英語担当の教員から指導法や教材について指導を受け，指導計画の改善や教材の見直しを行った。また，英語活動研修会に参加してもらい，小中連携の必要性や課題についての共通理解を図る機会ももった。さらに，中学校の英語の授業を参観し，本校の英語活動の授業を見直した。今後もお互いに授業を参観し合う機会を作り，日常的に意見交換ができるようにしていくことを確認した。

児童が英語活動に親しむことができるようにＩＣＴの効果的な活用のあり方を探った。Ｗｅｂ上のディジタルコンテンツの活用も積極的に行い，本校の実態にあったＩＣＴ活用マニュアルにまとめた。

3　本校における取組の成果等

(1)　成果

・　年度当初，最初はあいさつの型を示し，すべての児童が抵抗なくあいさつをすることができるようにしたことで，ＡＬＴと気軽にあいさつを交わすことができるようになってきた。慣れるにしたがってダイアローグの数を増やし，天気や体調，週末の過ごし方などあいさつの内容を高めることもできるようになってきている。また，あいさつをするときＡＬＴに対して笑顔で発話している児童を称揚したことで，少しずつ表情も意識してあいさつをしている児童が増えてきた。意識調査でも「あなたは英語活動が好きですか」という問いに対して，８５％の児童が「好き，どちらかと言えば好き」と回答している。また，多くの児童が「ＡＬＴと会話をすることを楽しみにしている」と回答している。

・　フリートークの活動には，コミュニケーション活動に対する関心を高めるという効果もあった。うまく言えなくても友達から“ Yes ”“ No ”という反応が返ってきてうれしそうな表情を

浮かべている児童も多い。また，普段の生活ではなかなか聞くことがないようなことも英語活動のフリートークタイムの中ではごく自然に聞くことができるのでコミュニケーションをすることの楽しさや喜びを体感させることもできた。

・　ＡＬＴの発音を十分に聞くことができる時間を確保するために，１単元のうちの２時間は大型絵本の読み聞かせの活動を取り入れた。２時間続けて同じ絵本にすることで，ところどころＡＬＴと一緒に発話する児童もいた。また授業過程の終末に位置づけたため，ＡＬＴと児童との一体感の雰囲気の中で授業を終えることもでき効果的であった。ほぼすべての児童が「絵本の読み聞かせが楽しみだ」と答えている。

・　新出単語の学習においては，まずＡＬＴの発話をしっかりと聞くことから始めた。十分に聞く時間を保証しないですぐに発話させようとすると，苦手意識をもっていたり不安に感じていたりする児童はなかなか声が出せなかった。そこで，十分に聞かせたあと，ＡＬＴの真似をさせたり，グループ単位で発話させたりするなど，「全体から個へ」のステップで進めた。その結果，自分から進んで発音したり一生懸命ＡＬＴや友達と会話をしたりしている児童が増加した。

・　アクティビティの途中でどう言えばいいのか困ったり，答え方が分からなくなったりしたときにはＡＬＴに“Excuse　me”と言ってから質問すればよいことにしていたので，自分から進んでＡＬＴにたずねることができるようになった。いつもＨＲＴが間に入るよりも，「このようなときにはこうたずねる」という型を示しておくこともコミュニケーションの力を付ける上で効果的な手立てであると分かった。

・　指導目標と評価規準をシンプルにしたことで，評価方法を工夫しやすくなり，児童のよいところを進んで評価・称揚することができるようになった。英語の発話にかかわる活動の評価をＡＬＴが行い，声の大きさや表情など意欲面をＨＲＴが行うなど事前に打合せをしておくことで，授業中の評価がスムーズにできるようになり，児童への称揚もタイミングよくできるようになった。また，授業の最後にＡＬＴやＨＲＴと１対１で対話をする活動を位置付けた。そこでは，その時間に学習したダイアローグを発話することで「今日習った会話がうまく言えた」という充実感を保証するとともに，一人ひとりの児童の伸びを確認することもできた。

(2)　課題

・　２年間の研究で，「第５学年英語活動年間指導計画」と「第６学年英語活動年間指導計画」を作成し，両学年で実践をおこなった。来年度以降も，この計画に沿って実践を重ねるとともに，児童の発達段階や興味，学習経験などをふまえて，さらに吟味しよりよい計画に高めていきたい。

・　状況設定やアクティビティでは実物を使うことが児童の関心を高める上で非常に効果的であることが分かった。身近なものを使って教具を作ったり，代用品を探して活用したりしていきたい。また，すべての職員がＨＲＴ単独の英語活動の授業に対応できる指導力を身に付けるために，ディジタルコンテンツを開発したり，ＩＣＴ活用能力の向上のために職員研修の充実を図ったりしていきたい。

・　今年度もＨＲＴがＴ１となり，ＨＲＴが主導で授業を進めた。そのことで児童の実態に合わせた指導ができるようになったが，扱うダイアローグやアクティビティによってＡＬＴとの連携の仕方が異なるので，より綿密な打合せをしていきたい。

・　英語ノートの活用についての研究は，まだ始まったばかりである。児童にコミュニケーション能力が身に付くような活用の仕方や児童の活動意欲を引き出す活用の工夫など，さらなる実践研究を積み重ねていきたい。

・　中学校との連携も大切である。小学校で学習した単語やフレーズ，ダイアローグなどの情報や，中学校で学習する内容をお互いに共有することで，児童の意欲の高まりが一層期待できると思われる。今後も連携を密にしていきたい。

拠　点　校　の　事　業　実　施　報　告　書

拠　点　校　名：赤磐市立軽部小学校

１　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

学　期	月　と　主な学校行事	実施した事業経過
１学期	４月　始業式 入学式 全国学力学習状況調査 参観日 家庭訪問	・本年度の実践計画についての話し合い ・実践計画に基づいて英語講師と年間を通した打ち合わせ ・実践の骨子とカリキュラムの決定 ・教材や教具の選定と購入
	５月　新入生歓迎行事 参観日 知能・学力テスト 修学旅行	・児童の実態に応じた方針の見直し ・英語講師とのＴＴによる指導法について打ち合わせ ・授業公開に向けた準備 ・ＣＤ，ＤＶＤ教材の選定
	６月　全校ふれあい行事 海事研修 水泳 器楽・マーチング 水泳特別練習(放課後) 音楽鑑賞会	・英語講師との指導法についての相談 ・授業公開 ・授業公開の反省と今後の授業展開について英語講師と協議 ・研究会に向けての話し合い
	７月　終業式 個人懇談 市水泳記録会 東部地区水泳記録会 器楽・マーチング	・１学期の実践についての総括 ・研究紀要の役割分担 ・研究発表会当日の係分担等の話合い ・岡山市に研究視察
２学期	９月　始業式 体育祭	・２学期の実践について英語講師と打ち合わせ ・研究発表会に向けた準備
	１０月　参観日 市陸上記録会 東部地区陸上記録会 研究発表会	・研究紀要の印刷 ・研究発表会
	１１月　水島校外学習 学習発表会	・基本的な学習スタイルの年間計画の見直し
	１２月　個人懇談 終業式	・英語講師と指導法についての相談
３学期	１月　始業式 参観日 ペース走・なわとび	・年間指導計画案，内容系列表案，全体計画案の見直し ・県国際交流員との交流活動
	２月　参観日 中学校１日体験入学 ペース走・なわとび	・国立教育政策研究所「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」研究報告会参加 ・横浜国立大学附属中学校に研究視察 ・今年度全般における推進事業の製菓と次年度の本校校内研究に向けての話し合い
	３月　６年生を送る会 参観日 卒業式	・外国語活動年間指導計画，外国語活動全体計画の完成

2　本校における取組の具体的な内容

〇教員の指導力の向上のための取組　効果的な指導方法の工夫改善について

平成１９年度の取組を生かしながら,「英語ノート」を使った実践を練り上げていった。週１時間行っているネイティブスピーカーの英語講師との活動で学んだことを大切にしつつ, 少しずつではあるが学級担任が単独で活動を組み立てて授業を行う形態へと移していった。

様々な学校への研究視察で得られたゲームやアクティビティの実践例を「英語ノート」の活動に取り入れたり, 正確な発音等に子どもが負担なくふれることができるように楽しい活動を工夫したりといった，より具体的な授業の手法について研修を行った。

〇ネイティブスピーカーの英語講師の効果的な活用について

地域人材のネイティブスピーカーである英語講師からは, 日本語との比較によって英語をとらえる視点を示唆していただいた。ＴＴの実施にあたっては，十分な打合せを行い，授業後は，互いに授業についての反省を行った。

ＴＴにおいて，ＨＲＴがどのようにＡＬＴとかかわるか，またＴＴと，ＨＲＴが単独で進める活動をいかに効果的に関連させるかについては，今後さらに研究をする必要がある。この２年間で得られた英語講師からの専門的な知識や指導法をしっかりと取り入れながら，ＨＲＴが中心となり，責任をもって外国語活動を実践していきたい。

また, 子どもたちが楽しみながら活動に取り組むことのできる授業の形態や指導法をさらに研究したい。

〇児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

評価規準を明確にし，教師の観察による評価を毎時間行って，児童の実態を把握した。

また，授業の最後には，児童が自分や友人の活動について感想を述べ合ったり,「ふりかえりカード」書いたりすることにより，教師は，児童の興味や関心等を把握するとともに，活動内容の反省を行った。

また，児童の感想等を参考に，次時の活動がより子どもたちにとって意欲的に取り組むことができる内容になるよう考慮しながら，計画立案に努めている。

〇その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）

１０月下旬に研究発表会を行ったところ, 参加した多くの中学校英語担当教員が研究協議終了後も積極的に感想等を言い合うことができ，有意義な意見交換が行われた。その場で，これからは小・中学校で互いに連絡を取り合いながら子どもたちが生き生きと取り組むことができる活動や, アクティビティで使う英語表現の間違いなどを互いに指摘し合うことで, 中学校と小学校との連携を高めていきたいという意見が出された。また，電子情報ボードやプレゼンテーションマウスの効果的な使用についても近隣の小学校と意見を交換しながら協力して深めていくことを確認した。

3　本校における取組の成果等

昨年度からの活動を通じて，外国語活動を好きになった児童が多くなり，授業中の発音の声が大きかったり，自分から進んでネイティブスピーカーに話しかけたりするなど，前向きに楽しみながら外国語活動に取り組んだ。今年度は，さらにＨＲＴ中心の外国語活動を行ったので，活動を心待ちにする児童の気持ちがよく伝わってきた。その背景には，子どもたちが英語で「自分から進んで話す・聞くこと」を徐々に習得してきていることが大きく影響していると考える。

授業については，チャンツやゲームだけにとどまらず，アクティビティにおいても積極的に英語を使って活動できる内容を工夫した。先進校視察で得られたゲームの数々やチャンツの方法，またアクティビティにおける買い物活動の展開は中学校での実践を取り入れるなど,「英語ノート」の指導資料を大切にしながらも，より子どもたちが活発に楽しむことができるように工夫を凝らした。

この成果を受けて，移行措置期間である次年度からの２年間を有効に使い，楽しみながら英語にふれることができるような活動形態や指導法についてさらに深めていきたい。本校がこの２年間で培ってきた外国語活動の様々な活動形態や指導法をもとに，年間指導計画をさらに改善するとともに，他教科（特に「国語」）との関連を全体計画に示す予定である。

また，ＩＣＴを使った指導法やネイティブスピーカーの英語講師による語学的なアプローチを基盤

として，より楽しみながら英語にふれる活動形態や指導法について，さらに研修を深めていきたい。同時に，これらの今年度の成果について，中学校区を中心にして他の小学校や中学校と共有し，地域全体で外国語活動の充実を図ることが拠点校としての使命だと考える。地域をあげた外国語活動の素地作りや指導法・指導形態の深化，さらには目前にせまった外国語活動の一斉実施に向けたカリキュラムの開発に貢献していきたい。

拠点校の事業実施報告書

拠点校名：岡山県美作市立英田小学校

１　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過
平成20年度

月	日	研修形態	研　修　内　容
４	14	校内研修	本年度の研究の方向性について確認
	15	ＡＬＴ交替に伴う打合せ	本年度の指導内容についての打合せ
	28	校内研修	本年度の研修計画について 小学校学習指導要領　第４章　外国語活動について 英語ノート，付属ＣＤ，指導資料について
５	26	校内研修	英語活動のねらいや指導上の留意点について検討
６	９	校内研修	英語活動指導法に関する演習 ・１単位時間の学習過程の明確化・教材・教具の工夫について ・効果的な TT について ・ＡＬＴによるクラスルーム・イングリッシュの指導
	23	校内研修	指導案検討，第５学年，第６学年へのアンケート内容検討
	26	アンケート実施	第５学年，第６学年への第１回アンケート実施
７	１	公開授業 美作市小学校英語活動研修会（市教委主催）	第３学年「時刻の言い方，聞き方に慣れよう」 指導者：ＨＲＴ　橋本　一慶　ＡＬＴ　Amy Elder 研究協議 講義「小学校英語活動の指導について」 　講師：岡山県教育庁指導課指導主事　西田寛子先生 情報交換
	14	校内研修	今後の研修計画について 小学校外国語活動研修ハンドブックについて
	24	校内研修	DVD「You can do it.-小学校に英語がやってきた！-」を視聴し，『「楽しませる・引き寄せる」外国語活動のあり方』を探る。
８	６	研究推進委員会	学年別年間計画の検討，研究授業，研究発表会，研究紀要作成について
	８	校内研修	学年別年間計画の検討，研究授業，研究発表会，研究紀要作成について
	29	校内研修	英語活動の指導法研修（演習） 　講師：「Genki English!!」代表 Richard Graham(教育コンサルタント)
９	１	研究推進委員会	学年別年間計画検討，紀要作成準備，グループ別研修の進め方について
	８	校内研修	学年別年間計画検討，紀要作成準備，グループ別研修の進め方について，小学校学習指導要領解説 外国語活動編について
	26	校内研修	研究授業について，指導案作成
	29	校内研修	研究授業について，指導案作成
10	17	研究推進委員会	研究授業の日程調整について，紀要作成準備
	21	研修視察	御南中学校区英語教育成果発表会参加（岡山市立西小学校）
	27	校内研修	研究授業の指導案検討，今後の研修の内容確認
	29	研修視察	英語活動等国際理解活動研究発表会参加　（全員） （美咲町立柵原東小学校）
	30	連携協力委員会	小学校英語活動と中学校英語の授業参観について，小学校英語活動の英語ノートと中学校英語の教科書の内容について
	31	研修視察	中道中学校区英語教育（活動）研究発表会参加 （津山市立鶴山小学校）
11	４	ＩＣＴ活用研修	多目的教室のＩＣＴ機器の使用法の演習
	７	中学校英語授業参観	中学校の英語授業参観（美作市立英田中学校）
	11	研究授業	第１学年「どうぶつはすきですか」 指導者：ＨＲＴ　永田　恵子　ＡＬＴ　Amy Elder
	13	美作市小学校英語活動研修会（市教委主催）	説明「小学校外国語活動について」 　講師：美作市教育委員会学校教育課指導主事　新免道明先生 情報交換 質疑応答

			（美作市役所作東総合支所）
	18	研究授業	第２学年「わたしの顔」 指導者：ＨＲＴ　治郎丸　ひとみ　ＡＬＴ　Amy Elder
	25	研究授業	特別支援学級「どんなどうぶつが　いるかな？」 指導者：ＨＲＴ　小林　順，岡本　知子，原田　郁子 ＡＬＴ　Amy Elder
		研究授業	第６学年「行ってみたい国を紹介しよう」 指導者：ＨＲＴ　小林　圭介　ＡＬＴ　Amy Elder
12	2	研究授業	第５学年「外来語を知ろう」 指導者：ＨＲＴ　春名　晶子　ＡＬＴ　Amy Elder
	4	研究授業	第４学年「クイズ大会をしよう」 指導者：ＨＲＴ　石川　勝志　ＡＬＴ　Amy Elder
	8	連携協力委員会	小中連携授業について日程と内容の検討
	12	研究推進委員会	第５学年，第６学年へのアンケート内容，第１学年～第４学年へのアンケート内容の検討，研究発表会の日程について，研究紀要作成について
	15	校内研修	第５学年，第６学年へのアンケート内容，第１学年～第４学年へのアンケート内容の検討，研究発表会の日程について，研究紀要作成準備
	17	アンケート実施	第１学年～第４学年へのアンケート実施
	18	小中連携授業	第６学年「質問してもよろしいでしょうか」 （第５学年までと第６学年１・２学期の学習内容の復習） 指導者：ＪＴＥ　赤畑　さとみ　ＡＬＴ　Amy Elder ゲスト・ティーチャーとして中学校より３人，本校より２人の先生を迎えて授業を行う。
		連携協力委員会	研究協議 指導助言：美作市教育委員会学校教育課指導主事 新田義純先生，新免道明先生
		アンケート実施	第５学年，第６学年への第２回アンケート実施
	19	研究推進委員会	研究紀要原稿準備
	22	校内研修	研究紀要原稿検討
	24	校内研修	研究発表会当日授業の指導案検討，研究紀要原稿準備
	25	校内研修	研究発表会当日授業の指導案検討，研究紀要原稿準備
		研究推進委員会	研究紀要原稿検討
	26	研究推進委員会	研究紀要原稿検討
1	6	研究推進委員会	研究発表会実施要項について，当日運営計画・全体会運営計画について，発表内容について
	9	校内研修	当日運営計画・全体会運営計画について，発表内容について
	13	校内研修	発表内容について，研究発表会準備
	14	研究発表会準備	研究発表会準備
	15	研究発表会準備	研究発表会準備
	16	研究発表会	平成 19・20 年度文部科学省 「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校 平成 20 年度英田小学校研究発表会 公開授業 第５学年　「ランチ・メニューを作ろう」 指導者：ＪＴＥ　赤畑　さとみ　ＡＬＴ　Amy Elder 第３学年　「自分達が調べた国のお正月を紹介しよう」 指導者：ＨＲＴ　橋本　一慶 デモンストレーション授業 第６学年　「将来の夢を紹介しよう」 指導者：京都市教育委員会指導主事　直山　木綿子先生 研究発表 指導助言 講師：岡山県教育庁指導課指導主事　西田　寛子先生 講演　演題「外国語活動必修化を迎えるにあたって」 講師：京都市教育委員会指導主事　直山　木綿子先生
	23	研究推進委員会	英語活動研究発表会の反省
	26	校内研修	英語活動研究発表会の反省
2	9	校内研修	今年度の研究の取組の反省
	16	校内研修	今年度の研究の取組の反省
3	2	校内研修	来年度の研究の方向性について

２　本校における取組の具体的な内容

(1) 教員の指導力の向上のための取組について

本市では，現在市の予算で，民間委託業者より全小学校にＡＬＴ（Assistant Language Teacher の略：外国語指導助手）が約週１～２日派遣されている。本校でも，昨年度の 10 月より週に１日，毎週ＡＬＴが派遣されている。一昨年度までは，学校の年間計画をもとに，ＪＥＴプログラムによる派遣のＡＬＴとともに，英語活動を行っていた。昨年度４月よりの拠点校指定，10 月のＡＬＴの交替に伴い，本校でもＡＬＴに頼りすぎず自分たちで英語活動を計画し実施するための，教員の指導力向上が望まれるようになった。

そこで，理論研修，授業を通した研修，ワークショップ型研修，ＩＣＴ活用についての研修，先進校視察など様々な研修を行った。

ア　理論研修

昨年度に引き続き，小学校における英語活動の在り方について理論研修を行った。

平成20年３月末に新しい小学校学習指導要領が告示され，続いて小学校学習指導要領解説外国語活動編も示された。それらの内容を児童に指導するために，平成20年４月より，英語ノート（試作版），英語ノート付属ＣＤ，英語ノート指導資料が拠点校に配布され，第５，６学年では，英語ノートを使用して英語活動を行うこととなった。そこで，本校でも，新しい小学校学習指導要領や小学校学習指導要領解説外国語活動編を用いて，これから小学校外国語活動で，何をめざし，児童にどのような力をつけるのか，どのような点に留意して指導していかなければならないのかを学習していく必要に迫られた。新しい小学校学習指導要領や小学校学習指導要領解説外国語活動編を用いて，全員で読み合わせを行ったり，個人研修で細かく読み込んだりして理解を深めるようにした。

また，小学校外国語活動研修ハンドブックが全国の全小学校に配布されると，必要と思われる部分を増し刷りし，それについても全員で読み合わせを行ったり，個人研修で細かく読み込んで理解を深めたりした。

夏休みには，独立行政法人教員研修センター作成の小学校における外国語活動の充実を図るための研修教材ＤＶＤ「You can do it.－小学校に英語がやってきた！－」を視聴して，英語活動に取り組む校内体制の在り方や英語活動の授業における工夫等について研修した。

イ　授業を通した研修

本校では，英語活動の授業をＨＲＴ（Homeroom Teacher の略：学級担任）やＪＴＥ（Japanese Teacher of English の略：日本人英語教師）とＡＬＴの TT 指導を基本として行っている。平成 20 年 10 月のＡＬＴの交替により，ＡＬＴの本校への勤務時間が以前より制限されるようになってきたが，小学校第１学年からの系統性を考えて全学年で年間計画を立てて英語活動の授業を行っている。拠点校として，第５学年，第６学年の英語活動についてのみ研究するのではなく，全職員が一丸となって小学校における英語活動を研究するというスタンスで臨むこととなった。

授業研究（指導案検討会→研究授業→授業反省会）は，具体的な指導法を学ぶためにも，一番効果的な方法であると思われる。昨年度（平成19年度）は，まず，英語活動担当者が研究授業を行った。

校内は，もちろんのこと近隣の小・中学校へも案内を出し，公開授業を開き研究協議を行ったり，外部講師を招いて指導助言をいただいたりもした。実際に授業者が指導案を書いて校内で検討し，研究授業を行い，授業反省会で協議することにより，授業者はもちろんのこと，参観者も授業のイメージを持ちやすく，校内の共通理解も図りやすかった。

本年度（平成20年度）は，英語活動を担当しているＨＲＴとＪＴＥがＡＬＴとの TT により全員１回ずつ研究授業を行うことにした。指導案検討会→研究授業→授業反省会の流れを毎時間の授業で持ったことは，研究授業が終わるたびに新たな積み上げができ有効であった。

岡山県教育庁指導課の西田寛子指導主事を招いての研修では，ＨＲＴの役割についてや場面設定の工夫などについて，示唆をいただき大変有意義な研修となった。

また，授業研究では，指導案検討会から授業反省会まで，次の５点を授業研究の視点として意識して取り組んだ。

○授業で扱う題材・語彙・表現
○導入（場面設定）の工夫
○活動（ゲーム等）の工夫
○支援の工夫
○評価の工夫

協議の視点を明らかにすることは，活発に意見が交換されるなど有効な手立てだといえる。

今後は，指導案の中に上記の授業研究の視点がよくわかるように記述をしていき，授業者も参観者も授業のイメージが持ちやすいようにしていきたい。

また，授業後の研究協議で，クラスルーム・イングリッシュの使用について，もっと授業の中で効果的にクラスルーム・イングリッシュを使用できるようになりたいとの意見が出た。今後も継続して，校内研修の時間にクラスルーム・イングリッシュの練習や効果的な使用について研修する必要がある。

ウ　ワークショップ型研修

指導方法について学ぶため，英語活動体験を行った。ＡＬＴと英語活動担当者が指導者となり，研修の参加者が児童役となって英語活動を体験した。ゲームなどでは，実際に児童役となって参加することにより，ゲームの楽しさを体験するとともに，実施上気を付けることなどを学んだ。

夏休みには，民間の「Genki English!!」代表の教育コンサルタント Richard Graham（リチャード・グレアン）先生を講師に迎えて，英語活動の指導法について，ワークショップ型研修で学んだ。前半は，教職員全員が児童役で参加し，後半は，一人が指導者役になり，その他の参加者が児童役となり，指導法を体験した。参加したほとんどの教職員は「英語活動の指導についての不安がいくらか軽減された。」という感想を持ち，２学期からの英語活動の授業への意欲を増す研修となった。

エ　ＩＣＴ活用についての研修

本校では，本年度（平成20年度）に主に英語活動を行う教室として多目的教室を整備した。ＩＣＴ環境も整備して，全教職員がその教室に行けば英語活動がすぐ行えるように工夫した。その後，ＩＣＴ機器の使用法について校内研修で共通理解を図るとともに，実技演習も行った。

オ　先進校視察

本年度は，英語活動を担当しているＨＲＴとＪＴＥが全員研究授業を行うことになり，授業のイメージをつかむために，他校の実践を自分の目で確かめたいという要求が教職員の中に高まった。

そこで，近隣の拠点校の研究発表会に全教職員で参加することにした。授業の欠時も少なくするよう工夫し，全員で参加することができた。

全教職員が，自分の目で，生の英語活動の授業を見て授業のイメージを持ち，教材・教具の工夫なども学ぶことで，研究授業に向けて何を準備すればよいのかがわかった。そして，校内の英語活動研修に取り組む意欲をより高めるきっかけとなった。

(2) 効果的な指導法の工夫改善について

ア　１単位時間の基本的な学習過程の明確化

英語活動の目標を達成するために，１単位時間の基本的な授業の流れを設定し（下に示す図），教師も児童も安心して効果的な活動ができるようにした。ただし，単元や題材，児童の実態に応じて，学習過程は柔軟に変化させることにした。

さらに，年度の途中からではあるが，学習過程をカードにして授業の始めに示すことで，児童が見通しを持って学習できるようにした。

〈１単位時間の基本的な学習過程〉
- Greetings　あいさつ
- Warm-up　歌や簡単なゲームなど
- Review　前時の復習など
- Aim　本時のめあての確認
- Practice　練習（新出表現の理解と練習）
- Activity　主となる活動（ゲームなど）
- Wrap-up　本時の振り返り
- Closing　あいさつ

１単位時間の授業や単元を計画する上で，言語習得の流れを意識することもした。

○十分なインプット（聞き取り）を行い，アウトプット（発話）を急がない。

○英語活動で行うゲームもインプットから，徐々にアウトプットを増やす流れで行う。
- 英語を聞いて理解すればできるもの
- 絵を見て英語を言えばできるもの
- 思ったことや考えたことを英語で答えればできるもの
- 尋ねられたことを理解し応答する会話を続ければできるもの

○発話についても，学級全体→グループ→個人という流れを大切にし，児童が抵抗なく一人でも発話できるようにする。

また，単元の中に，全体活動，グループ活動，ペア活動，個人活動をバランスよく組み込むことにした。

以上のことを考えながら授業の計画・実施・反省を繰り返す中で，教師は授業を計画しやすくなり，授業の進行も安心して行えるようになってきた。

児童も練習の後にゲームがあること，ＡＬＴやＣＤの英語表現を「聞き取る」から，「真似て言う」，「自分だけで発話する」という順序をふむことにより，発話への抵抗が軽減されてきているように思う。

イ　教材・教具の工夫（英語ノート，ＣＤ，ＤＶＤ等の活用を含む）
(ｱ) 他教科との関連を図った教材
第６学年では，総合的な学習の時間の探求的な活動との関連を図った授業にも取り組んだ。その単元，題材では，児童の英語や異文化への興味・関心を高めることができた。
例えば，第６学年「行ってみたい国を紹介しよう」（英語ノート試作版）の単元との関連で，児童が自分の行ってみたい国の名所や文化遺産，特徴的なものを総合的な学習の時間にインターネットの Web ページや書籍などで調べる活動を行った。児童は，自分が行きたい国やその理由について調べることを通して，よりその国に興味を持つとともに，自分が伝えたい内容が見つかることによりコミュニケーションへの意欲が高まったようである。

(ｲ) 教材・教具の整備
○　楽しい英語活動実施のための工夫
アの１単位時間の基本的な学習過程に沿って，児童が楽しく英語活動に参加でき，活動が分かりやすくなるように，また，指導者が授業を計画・実施しやすいように次に示すような教材・教具を整備した。
○全児童のネームカード（英語と日本語で名前が書いてある。）
これは，各教室に置いておき，英語活動の時間にはそれをつけて学習するようにした。
○歌の本とＣＤ，ＤＶＤ
○チャンツの本とＣＤ
○ゲーム，アクティビティの本
○チャンツを行う際にリズムを取るためのリズムボックス付きの電子キーボードとスピーカー
○絵カード作成本を使用し，絵カードを印刷後ラミネート加工を行ったもの
○市販や手作りの英語かるた
○スキットなどに活用できるハンドパペット２種類
○おはじき
○さいころ
以上のものは，職員室の教材ラックと教材棚の中に整理しておき，いつでも取り出しやすいようにしておいた。
○月日・曜日・天気カード（黒板掲示用）
○ワークシートなどをはさんで持ち運びできる用箋ばさみ
○拡大プリンター使用による自作の拡大掲示物
以上のものは，多目的教室（主に英語活動を行う教室）のロッカーの中に整理しておき，いつでも取り出しやすいようにしておいた。
○世界地図
○アルファベットの掲示物
○英語の単語と絵がかかれたポスター
これらは，多目的教室に掲示しておき，いつでも児童の目に触れるようにしておいた。
昨年度と本年度の２年間に少しずつ，教材・教具を整備してきた。このことにより，指導者が少しずつ教材ラックや教材棚の中の教材・教具を参考にしながら，指導の工夫を考えるようになってきた。
また，研究授業では，指導の効果を上げるために，どの授業においても自作の教材作成に取り組んだ。それらは，授業を参観することにより使い方も共通理解され，本校の財産となった。これからも授業実践をする中で，自作教材という共有財産を増やしていきたい。
しかし，校内研修の中で，購入した全ての教材・教具の内容や使い方を十分に共通理解することはできていないのが現状である。日々の授業準備の中で教材研究をしながら使い方を学んだり，よい教材は校内研修の中で広めていく機会を持ったりしながら，使える教材という財産を増やしていかなければならない。

○　英語ノート（試作版）の効果的な活用
本年度（平成 20 年度）の４月に第５学年と第６学年の英語活動の教材として，英語ノート（試作版）と付属ＣＤ，指導資料が拠点校に配布された。年度当初は，英語ノート（試作版）と指導資料の内容に沿って指導していたが，やがて児童が昨年度までの歌やゲーム中心の内容からの変化にとまどいを示しているのが感じられた。そこで，「英語ノートを教えるのではなく，英語ノートで教える」というスタンスの切り替えを行い，歌やチャンツ，ゲーム等を通して児童が楽しみながら英語のリズムや表現に慣れ親しむように毎時間の授業を組み立てていくことにした。そして，友だちとのかかわり，学び合いが持てるように意識して授業作りに臨むようにした。
また，視覚や聴覚を精一杯使いながら児童が学べるように，英語ノートの内容に関連した絵カードや歌のＣＤ，チャンツのＣＤなどを用意した。また，英語ノートの場面絵を拡大プリンターを使用して拡大し黒板に掲示したり，英語ノートのアクティビティのページを実物提示装置で拡大提示したり等，音声からだけの情報以外に視覚からの情報も加えて児童が学習内容を理解できるようにした。
本年度の第６学年は，第５学年までの学習の素地をふまえて「道案内をしよう」の単元で，「校

舎内の道案内」を付け加えて学習した。また，配当時数より少ない時間で実施した単元もあったので，２学期末に第５学年，第６学年とも，１・２学期の復習をする時間を設定し，実施した。
　このように，児童の実態に応じて柔軟に年間計画を見直していくことは，毎年必要なことである。

○　ＩＣＴを用いた教材・教具
　本校では，本年度（平成20年度），主に英語活動を行う教室として多目的教室を整備した。
　ＩＣＴ環境も整備して，英語活動の授業が効果的に行えるようにした。電子情報ボード，パソコン，プロジェクター，実物提示装置，ＤＶＤプレーヤー，ＣＤプレーヤー，電子キーボード，スピーカーなどを設置した。
　電子情報ボードの自作教材を開発して使用したり，文部科学省作成の英語ノートのデジタル教材（試作版）を使用したりして，音声と動画を視聴して児童が分かりやすいようにした。さらに，児童が実際に電子情報ボードに触れながら，興味を持って英語表現に慣れるようにした。児童のアンケートからも，「電子情報ボードを使うのがとても楽しかった。」という感想が見られた。
　また，文部科学省作成の英語ノートのデジタル教材（試作版）は平成 20 年 12 月中旬より授業で使用しているが，電子情報ボード，パソコン，プロジェクター，スピーカーがあれば，アニメーションと一緒に音声が再生されるので，指導者にも扱いやすく，ＡＬＴとの TT が組めないときには，大変有効な教材である。また，電子情報ボードは指導者にとって扱いやすく，児童には学習内容に興味を持たせ，理解を助けることができる有効な機器である。

(ｳ) 評価の工夫
○　評価の観点
　学習指導要領における外国語活動の目標は「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」である。
　「外国語を通じて」，①「言語や文化について体験的に理解を深める」
　　②「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」
　　③「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」
の三つの柱を基に，評価することが必要である。
　本校の小学校英語活動でめざす子ども像の三つの観点「人とのかかわり」「異文化とのかかわり」「言葉とのかかわり」も上記の三つの柱につながるものである。
　上記の②の態度については，第５学年，第６学年では，具体的なめあて「Eye contact 目を見て」「Loud voice 大きな声で」「Smile 笑顔で」「Listen carefully 注意深く聞いて」「With gestures ジェスチャーをつけて」の中から，１～２点を毎時間めあてとして示した。授業後の教師による評価，児童による自己評価・相互評価の際にも，そのめあてについての振り返りを行うようにした。

○　評価方法
　評価の方法としては，教師による評価と児童による自己評価・相互評価等がある。
・　教師による評価
　教師による評価の方法としては，行動観察・発表観察，「英語ノート」（試作版）の点検，ワークシートやインタビュー・シート等の点検がある。
　例えば，「英語ノート」（試作版）には児童がリスニングで聞き取ったことを直接書き込んだり，インタビュー・ゲームでの質問の答えを書き込んだりできるが，授業後にこれを点検すれば評価することができる。
　これらの評価を活かしながら，次時以降の児童への支援と授業改善に努めるようにした。
　行動観察・発表観察については，上記の①～③の観点から，それぞれの時間に目標を設定し，それに合わせた評価規準に従って児童を観察した。
　ＡＬＴにも，短時間ではあるが放課後に授業反省の時間を持ち，評価のための情報交換に加わってもらった。
　また，授業の振り返り[Wrap-up]の時に，本時の授業の中で，態度面や表現面についてよかったところを児童に声かけをするようにした。ＨＲＴやＪＴＥ，ＡＬＴから認めてもらうことは，児童にとっても自信になり，次時以降の英語活動への意欲を向上させることになっている。
・　児童による評価
　児童による評価として自己評価・相互評価等がある。
　授業の振り返り[Wrap-up]の時に，本時の授業の中で，自分ががんばったところや友だちががんばっていたところ，学習した英語表現や異文化，友だちに対する新たな気付きなどを発表させる時間を設定した。
　また，第５学年，第６学年では，単元の終了時（または後半）に，振り返りカードを用いて自己評価・相互評価を行うようにした。振り返りカードは，上記の①～③の観点（または，その中から選択した観点）について４段階で評価する部分と，自由に記述する（自己評価と相互評価）部分でできている。
　評価については，具体的な評価規準の作成がまだできていないのが現状である。年間計画の見

直し・検討と併せて，具体的な評価規準の作成に早急に取り組む必要がある。
　また，振り返りカードを含めた，ワークシート等をまとめて綴じておくファイルについても，学年毎にそれぞれの扱いになっている。学習の積み重ねがわかり，児童の意欲を喚起させるためにも，今後「英語活動ファイル」（仮称）を作成することに取り組んでいきたい。

(ｴ) 教員の役割
　本校では，一昨年度までは，学校の年間計画をもとにＪＥＴプログラムによる派遣のＡＬＴとともに英語活動を行ってきた。昨年度の４月よりの拠点校指定，10 月のＡＬＴの交替に伴い，本校でもＡＬＴに頼りすぎず，教員が主体となり英語活動を計画し実施しなければならなくなった。そこで，まず，教員（ＨＲＴ，ＪＴＥ）とＡＬＴの役割を明らかにし，その後，効果的な TT のあり方を探った。

○　ＨＲＴ，ＪＴＥとＡＬＴの役割の明確化
　教員が主体となり英語活動を計画し実施するために，まず，教員（ＨＲＴ，ＪＴＥ）とＡＬＴの役割を明らかにし，その後，効果的な TT のあり方を探った。
・　教員（ＨＲＴ，ＪＴＥ）の役割
　教員（ＨＲＴ，ＪＴＥ）の役割としては，次のようなものがあげられる。
　　○児童の実態を把握し，指導計画を立てる。
　　○教材・教具の作成，準備
　　○活動の指示，授業の進行（なるべくクラスルーム・イングリッシュを使用して）
　　○ゲームなどの活動が，楽しく，スムーズに行える学級作り
　　○授業のコントロール（児童の学習態度の観察や注意，意欲の喚起）
　　○児童への賞賛
　　○児童のつまずきへの支援
　　○英語を学ぶ学習者としてのモデルとなる。
　　・児童と一緒に活動する。
　　・ＡＬＴと英語でコミュニケーションを楽しむ。
　　○評価をする。（児童の活動状況，関心・意欲・態度，授業評価）
・　ＡＬＴの役割
　ＡＬＴの役割としては，次のようなものがあげられる。
　　○指導計画の作成に協力する。
　　○教材・教具の作成，準備に協力する。
　　○言語材料を児童に話し聞かせる。
　　○自国を含めた様々な国の習慣や文化を児童に伝える。
　　○外国語の使い方や発音を児童に指導する。
　　○評価をする。（コミュニケーションに対する態度，言語や文化についての理解）

○　効果的な TT のあり方
　本校の英語活動の授業は，ＡＬＴとの TT を基本としているので，ＨＲＴやＪＴＥがＡＬＴと役割分担をしながら，効果的な指導を行うように工夫した。
　例えば，TT で行うと効果的なものとして，スキットの役割演技，ゲームのデモンストレーション，個々の児童への細かな支援，賞賛と評価などがあげられる。
　本校の英語活動の授業は，ＡＬＴとの TT を基本としているので，ＨＲＴやＪＴＥがＡＬＴと役割分担をしながら，効果的な指導を行うように工夫した。
　これらを，ＡＬＴとの打合せや指導案を立てる際にも意識しておき，授業に活かすようにした。授業実践をつんでいく中で，打合せの時に，ＨＲＴやＪＴＥの方から，ＡＬＴに「このスキットの時には，○○先生は，□□役になってくださいね。私は，△△役になりますから。」と，役割分担を意識した言葉が聞かれるようになった。授業計画も，ＨＲＴやＪＴＥが主体となりＡＬＴに相談をして，作り上げていくようになってきた。
　そして，作成された略案は，ファイルに綴じて残していき共有財産としていくことにした。このことは，「学年の担任が替わっても，ＡＬＴが替わっても，誰でも英語活動の授業ができるようにしよう」という教員の共通理解ができてきたからだと言える。

(ｵ) 環境整備
　児童が英語活動に興味・関心を持つようにするため，教室や廊下の掲示物などの環境を整えた。
○　多目的教室の整備
　本年度，英語活動を中心に行う教室として多目的教室を整備した。その部屋に入ったら，自然と英語を学習したくなるような雰囲気を作るために，教室前後に楽しい英語の掲示物，世界地図やポスター，外国のくらしや文化がわかる写真などを掲示した。
　また，チャンツやスキット，ゲームを通して英語活動の学習をするために効果的な電子情報ボード，電子キーボードやＣＤプレーヤーなどを常時設置しておいた。どの学年も，題材に合わせて様々に利用し楽しく英語活動の授業ができた。
　机を教室の端に寄せてオープンスペースを作ることにより，体を動かして伸び伸びとジェスチ

ャーをしたり，ゲームをしたりすることもできた。

○　校内の掲示物の整備

・　各学年の教室の掲示物

簡単な挨拶や対話を示した掲示物や月，曜日，天気を表した掲示物を作成して，常時児童が目に触れることができるようにした。

また，学習した単語，フレーズやセンテンスが繰り返し練習ができるような掲示物も工夫した。

・　校内掲示板の掲示物

主に，全校の児童が毎日通る児童玄関や階段の掲示板を利用して，「English コーナー」を作り，英語に興味・関心を持たせるようにした。

・　図書室，給食室からの異文化理解の掲示物

本校の図書室や近隣の図書館の外国にかかわる本を選び出して，「世界のおはなし」を紹介する掲示物を作り，世界のお話に親しめるようにした。

また，給食の献立に外国の食事を取り入れてもらい，日本食との違いを感じながら，給食を食べることができた。

「給食だより」にも，外国から伝わってきた食事の由来や，日本の食事との類似点を載せてもらい，食べ物から異文化に触れる機会を持つようにした。

(3) 児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

児童の意識を調査するために，第５・６学年児童を対象に６月と 12 月の２回アンケート調査を実施した。各調査項目毎に，（とても・まあまあ・あまりない・まったくない）の４段階で評価させた。

そして，（とても）を４点，（まあまあ）を３点，（あまりない）を２点，（まったくない）を１点とし，平均を出し，平均の有意差の有無を調べるために，統計的手法を用い変容の度合いを捉えた。

Ｔ 検定の結果

アンケート項目	５　年					６　年				
	６月平均	12月平均	T値	T境界値	有意差	６月平均	12月平均	T値	T境界値	有意差
１．英語の時間は楽しいですか。	2.65	2.81	0.70	2.01		2.75	3.21	2.32	2.07	○
２．進んで参加していますか。	2.96	2.73	0.98	2.01		2.92	3.13	2.83	2.01	○
３．英語の勉強をもっとしたいと思いますか。	2.65	2.54	0.97	2.01		2.75	3.17	1.86	2.01	
４．英語で話したり聞いたりするのがすきですか。	2.31	2.58	0.71	2.01		2.54	3.00	2.30	2.01	○
５．英語の歌やゲームは楽しいですか。	3.04	3.35	1.41	2.01		3.13	3.17	0.18	2.07	
６．英語での簡単な文や会話を聞いて，わかりますか。	2.50	2.73	1.16	2.01		2.92	3.17	0.23	2.07	
７．先生の言葉をまねて，英語で話すことができますか。	2.73	2.88	0.72	2.01		2.88	3.21	1.73	2.01	
８．英語であいさつをすることができますか。	3.31	3.38	0.40	2.01		3.04	3.50	2.47	2.01	○
９．英語での簡単な質問に答えることができますか。	3.04	3.23	1.06	2.01		3.00	3.29	1.83	2.07	
10. 英語ノートを使った授業は，わかりやすいですか。	2.73	3.27	2.58	2.01	○	3.04	3.38	1.52	2.01	
11. 外国のくらしや文化について，もっと知りたいですか。	3.00	2.85	0.51	2.01		2.58	2.71	0.53	2.01	

Ｔ検定を行った結果，危険率５パーセントで，５年生の《10》，６年生の《１》《２》《４》《８》の項目で，有意に上昇した。他の項目については，有意差は見られなかった。

また，第１学年から第４学年までは 12 月にアンケート調査を実施し，児童の英語活動に対する意識について把握に努めた。

〈アンケート結果の考察〉

英語の時間が楽しいと感じている児童が増えてきている。また，歌やゲームに楽しんで取り組めている。今後とも，歌やゲームの多様性，児童を学習に引きつける導入や意欲を持たせる教材の工夫をしていきたい。また，「あいさつができる」「簡単な英語の質問に答えることができる」

と答えた児童の割合が高い。繰り返し練習してきた成果が表れていると考えられる。
　しかし，「英語で話したり聞いたりすることが好き」「進んで参加している」「英語の勉強をもっとしたい」の項目は，第５学年でやや低い。積極的に表現することが苦手な児童への手だてが必要である。他の教科とも関連づけながら，コミュニケーション能力の育成に努めていきたい。
　「英語ノートを使った授業はわかりやすい」という割合も高くなっている。昨年までは，ゲームや会話を主として，ALT とともに授業をしていた。本年度は，英語ノートの使用ということで年度当初は教師も児童もとまどいが見られたが，子どもたちに楽しく英語に触れさせようという意図のもとに，授業改善に取り組み，効果が上がってきたように思われる。また，HRT や JTE 主導の授業に代わり，より児童の実態をふまえた指導ができている成果だと思われる。先生もクラスルーム・イングリッシュを使いながら，英語で話す場面を見せることは，児童のモデルとなり，児童にとって英語がより身近なものになってきたと思われる。
　異文化に対する知的好奇心は，全学年ともやや低い傾向にある。外国の人とふれあうことが少なく，ALT を通してしか経験できない地域性もあると考えられる。情報の発信などにより，異文化を身近に感じることができるような取り組みがさらに必要である。
　英語活動が苦手な児童やわからなくて困っている児童が，どの学年にも数名いる。「間違えてもいいんだよ。」「忘れたら，聞いたらいいよ。」という授業への構えを示しながら，児童に寄りそい指導していくことが必要である。

(4)　ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について
ア　ＡＬＴの効果的な活用
　本校では，民間委託業者よりＡＬＴが週１回来校している。そして，ＨＲＴやＪＴＥがＡＬＴと TT を組んで英語活動の授業を行っている。民間委託業者との契約により，ＡＬＴの１日の勤務時間が制限されている中で，より多くの英語活動の授業の指導にかかわっていただけるように，年間，週ごとの英語活動の時間割り当てを英語活動担当者が行い，ＨＲＴやＪＴＥとＡＬＴへの連絡を行っている。
　本年度の前半までは，ＡＬＴの勤務日（１週間に１日）の授業時間以外の時間に打合せ，授業準備，授業反省を英語活動担当者とＡＬＴとで行っていた。指導案（略案）を英語活動担当が書いて，短時間で授業の打合せができるようにした。略案のテンプレートを作成することにより，誰でも気軽に略案が書けるような工夫もした。
　後半になると，ＨＲＴとＪＴＥが各々に指導案（略案）を書いて，ＡＬＴと打合せを行うようになった。指導案（略案）を用いての打合せであっても，翌週の３～４時間の授業の指導者であるＨＲＴやＪＴＥが各々にＡＬＴと打合せを行うには時間が不足しているのが現状である。
　打合せについては，言葉の問題や時間の問題など課題も多く「ＨＲＴとＡＬＴをつなぐ」コーディネーターの重要性を感じている。本校では，現在英語活動担当者がコーディネーターの役割をしているが，これからも学校内に１人～２人のコーディネーターが必要である。
　英語活動の授業の際には，ＡＬＴの自国を含めた様々な国の習慣や文化を児童に伝える機会を持てるように，ＨＲＴやＪＴＥが授業の中で，授業に関係のある内容でＡＬＴの自国のくらしや文化にかかわることを積極的に質問をしたり，児童から質問を募ったりした。
　また，給食時間には，ＡＬＴの先生に各学年の教室を順番に回って児童との交流を図ってもらうようにした。ＡＬＴの先生との人間関係ができてくると，児童がＡＬＴの先生に質問をしたり，授業で学習したフレーズを使って話しかけたりするなど，活発に交流が図られるようになった。
　また，ＡＬＴは英語を話すネイティブ・スピーカーなので，英語表現のデジタルコンテンツ作成の協力もお願いした。授業で学習するフレーズや，英語でのとっさの一言などをデジタルビデオカメラで撮影してＤＶＤに編集し，授業や給食時の学校放送で放映した。顔なじみのＡＬＴの先生がテレビ画面に映し出されることで，児童は興味深く見て英語表現に親しむことができていた。
　さらに，校内研修のクラスルーム・イングリッシュ習得の演習などでは，講師もお願いした。

(5)　その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）
ア　近隣中学校との連携
(ｱ)　連携協力委員会の実施
　本校は，卒業生がほぼ全員そのままのメンバーで英田中学校に進学する。そのため，同じ学区をもつ小学校と中学校が連携を図ることは，大変重要である。
　小学校で英語活動が実施されることになり，中学校の英語の学習へのスムーズな引継ぎを行うために小学校の教職員と中学校の英語科担当教員が，情報交換をする目的で連携協力委員会を編成した。委員会のメンバーは，小学校校長，中学校校長，小学校教頭，中学校教頭，小学校英語活動担当者，中学校英語科担当教員で構成した。そして，小学校での英語活動と中学校の英語科の学習内容（カリキュラム等）についての情報交換，児童・生徒の実態の情報交換，小学校・中学校のお互いの授業参観の日程調整，交流授業の計画・実施・反省などを行った。昨年度は小学校の英語活動の授業を参観していただくだけに終わったが，その反省をふまえ，本年度はそれ以外の内容の推進に力を入れて取り組んだ。

(ｲ) カリキュラム等についての情報交換

幸いにも，小学校と中学校に派遣されているＡＬＴが同じ人なので，ＡＬＴを介しての中学校の学習内容の情報は比較的得やすかったが，なかなか中学校を訪れてまでの情報交換はできなかった。小学校の英語活動担当者が中学校の教科書を借りて，その内容を確認したり，中学校の連携協力委員会のメンバーの人に小学校の英語ノート（試作版）を見ていただき，その内容を確認していただいたりした。現在の英田中学校で使用されている教科書の内容は，英語ノート（試作版）の内容と重なっている部分，関連が深い部分が多いことがわかった。

小学校英語活動では，「聞く」「話す」ことを重点的に扱うが，中学校英語科の学習では，「聞く」「話す」こと以外に「読む」「書く」こともバランスよく扱うようになる。

小学校英語活動で，英語のリズムや発音，表現に慣れ親しみ，児童が「英語は楽しい。」という思いを持って，安心して中学校の英語科の学習に移行できるように，指導方法の工夫等に取り組むべきだという認識を新たにした。

(ｳ) 授業参観

昨年度に引き続き，本年度も中学校の先生に小学校英語活動の授業参観をしていただいた。

あわせて，本年度は，中学校の英語科の授業を小学校から複数名参加して参観させていただいた。これは，連携協力委員会と委員間の連絡体制が有機的に働くようになった結果である。中学校の英語科の授業では，「読む」「書く」活動も重視されていることを改めて感じるとともに，自己表現力の育成は小学校も中学校も同様に重視されていることがわかった。

(ｴ) ゲスト・ティーチャーとしての授業への参加

中学校との連携の中で，本年度大きく一歩踏み出したことに，中学校の英語科担当教員の小学校英語活動の授業への参加があげられる。第６学年の２学期最後の英語活動「１・２学期の学習の復習をしよう」の授業に英田中学校より３人の先生にゲスト・ティーチャーとして参加していただいた。中学校の校長，教頭（共に専門は英語），英語科担当教員の３人の先生を招いた。そして，授業の中では，英語のみを話していただくようにした。本校の校長と英語が堪能な本校の教員，及び，授業参観に来られた美作市教育委員会の指導主事の方々もゲスト・ティーチャーに加わっていただき，第６学年の児童がより多くの人に，より多くの質問ができるように場を設定した。

第６学年の児童は，英語でしか伝わらない状況の中で，ゲスト・ティーチャーを相手に第５学年までと第６学年の１・２学期に学習したフレーズを使って,積極的にインタビューをしていた。授業後のアンケートにも，「ゲストティーチャーと話すのが楽しかった。」「また，インタビューがしたい。」などの感想が多く見られた。「自分の思いを伝える相手がいる」「英語を使って話せる相手がいる」という相手意識は，コミュニケーション活動には不可欠であるということを，小中連携の授業を通して実感することができた。

参加したゲスト・ティーチャーの中には，かつらをかぶってくださる先生もいて，英語活動をしている教室内が，まるで外国であるかのような場面設定ができた。

授業後の研究協議では，中学校から参加してくださった先生方から，小学校英語活動の授業の流れや「聞く」「話す」活動が重視されていることを体験したこと，第６学年の児童の英語活動に取り組む様子（関心・意欲・態度やコミュニケーション能力）を直接見られたことは大変意義深く，今後の指導に生かしていきたいという意見をいただいた。授業を参観してくださった指導主事の方々からも「小中連携のモデルの授業である。」とのお言葉をいただいた。

第６学年の児童にとっても，中学校におられる先生方と楽しく触れ合えたこと，自分の英語表現を受け止めてもらえた，通じたという経験が，中学校進学に向けて安心感につながったのではないかと思われる。これは，情意的な支援にあたると考えられる。

ｲ　美作市小学校英語活動研修会への参加と本校の取組の紹介

美作市教育委員会主催の美作市小学校英語活動研修会が昨年度に２回，本年度に 12 月現在までで２回実施されている。

本校からも英語活動担当者が参加し，本校の取組を紹介してきた。今までの４回の研修会のうち２回は本校で授業公開を行い，本校職員は全員参加して研究協議を行った。研修会には，少人数ではあるが近隣の中学校の英語科担当教員も参加してくださり，美作市内でも小・中学校の先生方の小学校英語活動への関心が高まってきていることがわかった。

本年度１月 16 日実施の平成 19・20 年度文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校　平成 20 年度英田小学校研究発表会へも美作市内の全小学校から，さらに美作市内のほとんどの中学校から参加者があり，本校の２年間の取組を発信することができた。

今後も，英語活動の実践を積み重ねながら，本校の取組を近隣の小・中学校へ情報発信していきたい。

ｳ　ＩＣＴの効果的な活用

本校の充実したＩＣＴ環境を授業に活かし，効果的なＩＣＴ活用の在り方を考え，授業実践に取り組んでいった。実際の授業では，様々な学習場面で学習支援のツールとしてＩＣＴを活用してきた。その活用の仕方は「教師が活用する場合」と「児童が活用する場合」の二つの場合があ

り，以下に示すようにＩＣＴの機能から五つの活用手段に分類し，それぞれの機能を活かして授業で活用した。

(ｱ) ＩＣＴの機能と活用方法

○　教師支援

①ネイティブスピーカーの代理として（電子情報ボード・ＤＶＤ・ＣＤ）
②チャンツ・ゲーム等の支援ツールとして（電子情報ボード・ＤＶＤ・ＣＤ）
③拡大提示等による学習内容の明確化（教材提示装置）
④コミュニケーションの場を設定するための支援ツールとして（ＴＶ会議システム）

○　児童支援

⑤調べ学習の支援ツール（インターネットによる異文化の調べ学習）

(ｲ) 環境整備

ＩＣＴ活用で大切なことは，だれもが簡単に使えるＩＣＴ環境を整備することである。本校では，こういったＩＣＴ機器を集中的に整備した教室（多目的教室）を整備し，この教室を中心に，英語活動を実践してきた。本校の環境整備で重視したことは，

・だれにでも使いやすいＩＣＴ環境
・音質を重視したＩＣＴ環境

の二点である。

○　だれにでも使いやすいＩＣＴ環境

本校の多目的教室には電子情報ボード・プロジェクター・パソコン・実物提示装置・ＤＶＤプレーヤー・ＣＤプレーヤー・電子キーボードなど様々なＩＣＴ機器を導入し，それぞれの機器の特性を生かした授業での活用に取り組んでいる。異なる機器を活用するたびにケーブルを抜いたり入れたりすることがないように，ＡＶセレクターのスイッチを切り替えるだけで必要な機器が活用できるようにした。また，操作方法を簡単に図解した説明書をその機器のそばに置き，操作方法については校内研修で全教員が体験した。このようにして「ＩＣＴの活用は以外と簡単だな。」という意識が教職員の間で芽生えつつある。

また，すべての普通教室にもＣＤラジカセ・ＤＶＤプレーヤーを整備し，ＤＶＤやＣＤによる英語の歌などを歌うような活動の支援を行っている。

○　音質を重視したＩＣＴ環境

英語活動の学習においてこれらの機器から再生される英語の発音はクリヤーな音質で十分な音量を確保することが大切である。本校の多目的教室もこういったことを配慮し，クオリティーの高い音響システムを導入している。多目的教室のスピーカーは，ホームシアター用の音響システムでクオリティの高い音を出すことが出来る。前述のようにパソコン・ＤＶＤ・電子キーボード（チャンツ用）の音声ラインは，ＡＶセレクターを経由し，すべてこのスピーカーにつながっている。

(ｳ) ＩＣＴの活用を推進するための校内研修

ＩＣＴ活用を推進するにあたっては，校内研修等により，実際にＩＣＴ機器を操作しながら，操作技能や活用の効果などを研修した。教員全員が機器にさわりながら，その使いやすさを実感していった。また，機器の操作の順序などを分かりやすく説明した操作マニュアルを作成し，ＩＣＴ機器の近くに置いて分からなくなったら参照できるように配慮した。

○　英語ノートにおけるＩＣＴの活用

・　英語ノートの拡大提示

英語ノートを活用する場合,まずＩＣＴの「⑤拡大提示等による学習内容の明確化（教材提示装置)」の機能を用い教材提示により，ノートの使い方等を説明した。本校の多目的教室には実物提示装置が備え付けてあり，必要に応じて英語ノートを拡大提示し説明等を行った。

・　自作ソフトによる指導例

英語ノートにはＣＤが付属でついているが，例えば第５学年のLesson１「世界のこんにちはを知ろう」の教材では，それぞれの国のあいさつがまとめて入っており，国ごとにランダムアクセスできないようになっていた。これは実際の授業では使いにくく，電子情報ボードでスピーカーマークがあるところを押すとその国のあいさつが発音されるような自作教材を作成した。

・　文部科学省作成デジタル教材（試作版）の活用

本年度の12月に文部科学省作成デジタル教材（試作版）を入手し，第５学年で試行した。

Lesson３の「数で遊ぼう」の場面で児童が使用したが，絵を動かしたり，キャラクターの絵の部分を電子情報ボード上で触れるとその物の英語が発音されるなど児童の学習意欲を喚起する内容であった。特に，教師が操作するよりも児童自身が操作すると児童の意欲は向上した。

(ｴ) ＩＣＴを有効に活用するための自作教材の作成

ＩＣＴ環境をいくら整備しても，そこによいソフトがなければ，児童の学習意欲を喚起することもなく，教員も使いにくいということで活用の意欲は減退する。ことわざにもあるように「仏作って魂入れず」の状態になってしまうのである。本校では，いくらか授業担当者の要望を聞き入れ，自作教材を開発することを試みた。教材が児童のどのような面をのばすために使われるの

か具体的なねらいを意識しながら，教材開発を試みた。その活用を試行していく中で次のようなことが分かった。
①指導者の意図を十分反映したものであること
②他の学校でも使っていただけるように著作権をクリアーしたものであること
③作成に時間がかからないこと
　教材の仕様については，児童の実態を熟知している指導者とよく相談し，要望をしっかり取り入れていく必要がある。そうすることで児童の興味や生活と合った教材作成が可能となる。本校でも英語ノートをより有効に使うために授業の指導者とよく相談しながら作成していった。第６学年の英語ノートLesson５の「道案内をしよう」では，英語ノートの指導の後，英田小学校の校舎内の道案内をしていくような教材を作ってほしいと要望があり，希望通りの教材を試作した。
　実際の授業では、「英田小学校のパソコン教室へ道案内をしよう」ということで自分の学校という親近感が児童の興味をそそり,電子情報ボード上で操作したりしながら楽しそうに学習した。
〈ビデオの活用〉
　本校では，英語活動の授業の記録ビデオをとっており，復習のビデオに活用したり，発音のシーン等を編集して教材化することも計画している。これらは短時間に著作権のことも簡単に処理できるので(ＡＬＴの許諾のみで可）教材作成にビデオを活用することは非常に有効である。
　本校ではハンドパペットで二人の対話のシーンをＡＬＴに二通りの声色で発声していただき，これをビデオに録画し編集して教材にしている。短時間に作成できて非常に有効な教材作成方法である。

３　本校における取組の成果等
(1) 教員の指導力向上のための取組について
・　研究授業を全学級で行うことになり，初めて指導案を書くことになった。初めての指導案を書くことに大変苦労したが，書いてみると英語活動はこういう流れで授業を行えばいいんだということがわかった。研究授業の時も，授業の流れと評価のポイントを押さえれば，なんとか授業を組み立てられることがわかった。研究授業をやってみないとわからないし，やってみたことで自信もつき見通しが持てた。
・　ＨＲＴとＪＴＥ全員が研究授業を行い，できるだけ参観することができたことは，ＨＲＴとＪＴＥ主導の授業とはどんなものかが，具体的にイメージでき勉強になった。毎回の授業反省を忙しい中でも，授業日の放課後に時間を設定し行ったことは，教員の共通理解を図ることや，次の授業に早速活かすことができ，研究の積み上げができた。
・　ＨＲＴやＪＴＥとＡＬＴとの役割分担が指導案を書き，授業を実施する中でわかってきた。しかし，ＡＬＴとの授業の中でのやりとりや細かな役割分担については，打合せの時間を確保することができず，難しさを感じる。
・　先進校視察に，10 月下旬に全員で行き，実際に英語活動の授業を参観したことは，授業の具体的イメージを持つには大変有意義だった。
・　先進校視察で得た他校のいろいろな指導案を見ることは，実践から得た成果物だけに説得力があり，自分の指導案作成に活かすことが出来よかった。
・　本年度７月に岡山県教育庁指導課指導主事の西田先生をお迎えし，指導をしていただいた研修では，導入の大切さや，指導者（ＨＲＴやＪＴＥ）が学習者のモデルとなることの大切さを教えていただき，英語活動の指導への不安が軽減された有意義な研修となった。
・　指導案の中に授業研究の視点（○授業で扱う題材・語彙・表現　○導入（場面設定）の工夫　○活動（ゲーム等）の工夫　○支援の工夫　○評価の工夫）がよくわかるように記述をしていき，授業者も参観者も授業のイメージが持ちやすいようにしていきたい。
・　クラスルーム・イングリッシュの使用について，もっと授業の中で効果的にクラスルーム・イングリッシュを使用できるようになりたい。今後も継続して，校内研修の時間にクラスルーム・イングリッシュの練習や効果的な使用法を研修する必要がある。

(2) 効果的な指導方法の工夫改善について
・　１単位時間の基本的な学習過程を明確にしたことは，教師も児童も授業の流れが分かって安心して授業に取り組めるようになりよかった。
・　手作りの教材・教具作りにも取り組んだ。児童の発達段階や実態に即した手作り教具は，児童が興味を持ちやすく，授業の中でも児童が受け入れやすく有効であった。今後も自作教材を増やしていきたい。
・　歌の本やＣＤ，ゲームの本など教材・教具も整備したが，研修の時間があれば活用法の研修をしてさらに有効に使えるようになりたい。
・　低学年は絵本や大型絵本を読んでもらえるだけでうれしい段階なので，これからも有効に絵本を授業の中に取り入れていきたい。
・　チャンツは英語のリズムに慣れるのに有効なので，多目的教室以外でも行いたい。そのために，今後は電子キーボードのリズムボックスを録音したＣＤやタンバリン等を用意するなどしていきたい。
・　導入（場面設定の工夫）の大切さが分かりスキットなどを工夫するようになったが，もっといろいろな導入の仕方がないか研究したい。

・　「担任が替わっても，ＡＬＴが替わっても，誰でも英語活動の授業ができるように」作成した略案は，ファイルに綴じて残していき共有財産とする。そして，それをＡＬＴとの打合せに用い，効率的な打合せになるようにしていきたい。
・　評価カードへの記入は，毎時間行うには時間的にも難しい。単元の後半や，締めくくりに行ったり，単元途中は短時間で記入する内容のものにしたりと，マンネリ化しないための検討と改善が必要である。
・　英語活動を中心に行う教室「多目的教室」を整備し，教材・教具を整えるなど，英語活動が行いやすい環境作りに努めたことで，児童は，楽しい雰囲気の中で伸び伸びと活動できるようになった。
・　各教室への掲示物については，あいさつについて時々触れたりするなど活用した。今後は，児童が興味を持って見たり，口ずさんだりできるように英語活動の時間に学習した内容（復習できる内容）がタイムリーに掲示できるようにしたい。
・　今後も，実践を重ねながら，本校の英語活動年間計画を検討し改善していくことが課題である。
・　評価については，第５学年と第６学年を通した具体的な評価規準表の作成がまだできていないので，年間計画の見直し・検討と併せて，具体的な評価規準表の作成に早急に取り組む必要がある。また，評価に基づく児童の個人差に対応した指導と支援の工夫をどのようにするかも今後の課題である。
・　振り返りカードを含めた，ワークシート等をまとめて綴じておくファイルが，学年毎にそれぞれの扱いになっている。学習の積み重ねがわかり，児童の意欲を喚起させるためにも，今後「英語活動ファイル」（仮称）を作成することに取り組んでいきたい。

(3) 児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について
・　第５学年と第６学年に本年度６月と 12 月に実施した英語活動に関する児童アンケートの結果から，「英語活動の時間が楽しい」と感じている児童が増えてきていることがわかる。また，「英語ノートを使った授業はわかりやすい」児童の割合も増えている。本年度から，英語ノートを使用するということで年度当初は教員にも児童にもとまどいが見られたが，子ども達を楽しく英語に触れさせようという意図のもとに，授業改善に取り組み効果が上がってきたように思われる。また，ＡＬＴ主導からＨＲＴやＪＴＥ主導の授業に代わり，より児童の実態をふまえた指導ができている成果だと思われる。
・　英語活動に関する児童アンケートの結果で，全学年とも異文化に対する知的好奇心が他の項目に比べてやや低い傾向にあった。本校のめざす子ども像の中の三つの観点の一つ「異文化とのかかわり」への働きかけがやや弱いことが分かった。英語活動の時間に英語表現に触れるだけではなく，「人とのかかわり」「異文化とのかかわり」「言葉とのかかわり」を意識して，指導していかなければならない。授業の中にもっと意識して，ＡＬＴに異文化を伝えてもらう「show and tell」の時間を設定したり，学校放送でＡＬＴの自国の文化について発信してもらったり，ＡＬＴ以外の外国の人と交流する授業を計画したりなど，もっと「世界を身近に感じる」内容の授業を行い，児童に「異文化」と「自文化」に興味を持たせるようにしていくことが大切である。
・　英語活動に関する児童アンケートを本年度は全学年で実施した。今後も継続的，経年的に実施し分析することで，児童の意識や実態を毎時間の授業や年間計画に役立てていきたい。また，児童アンケートの結果を真摯に受けとめ，今後の指導改善に生かしていきたい。

(4) ＡＬＴや地域人材の効果的な活用について
・　本年度の研修で，ＨＲＴやＪＴＥ主導の授業というものがわかって，授業の計画などが教員主導でできるようになってきているが，週１回のＡＬＴとの打合せの時間がなかなか取れないのが現状である。略案を残していき，改善を加えながら積み上げていくこと，そして，それを用いて短時間でもＡＬＴの打合せができるようにする工夫が必要である。
　また，打合せについては，言葉の問題や時間の問題など課題も多く「ＨＲＴとＡＬＴをつなぐ」コーディネーターの重要性を感じている。本校では，現在英語活動担当者がコーディネーターの役割をしているが，これからも学校内に１人～２人のコーディネーターが必要である。

(5) その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）
・　第６学年で実施した小中連携授業は，英田中学校の先生方の協力もありとてもよい授業実践だった。中学校入学を間近に控え，第６学年の児童の意欲付けになり，児童も安心感が持てたのではないだろうか。
　小中連携授業で，第６学年の児童は今まで自分が学んだ英語表現で自己紹介し，初対面の人にも動じないでインタビューができていた。これまでの学習の成果が現れていたように思う。第１学年～第５学年の児童も，第６学年時にはこのような姿になって欲しい。
　また，本校のめざす子ども像の「人とのかかわり」にもあるように，相手意識を持たせること，英語等を使ってコミュニケートせざるを得ない状況を作り「〇〇でしか伝わらないぞ」と思わせることの大切さも感じることが出来た授業実践だった。今後も，このような取組をぜひ続けていきたい。
・　多目的教室のＩＣＴ環境整備とＩＣＴ活用についての研修により，英語活動の時間の準備と雰囲気作りが短時間にできるようになって，指導者の負担が軽減された。しかし，効果的な活用と

なると，まだまだ研修が必要である。授業の中で実践を積みながら，よい活用法は情報を共有していくなどの研修に継続して取り組む必要がある。また，自作教材の開発にも継続して取り組みたい。

(6) 研究全体にかかわって

・　人とかかわる力やコミュニケーションを図ろうとする態度の育成は，英語活動の時間のみならず他教科でも重視すべきことである。英語活動で育ちつつある人とかかわる力やコミュニケーションを図ろうとする態度を他教科でも育てていけるよう取り組んでいきたい。

・　拠点校指定を受けてから，徐々に校内の研究体制が整い，校内研修を重ねる中で教職員の共通理解が図られ，共有財産ができてきた。一つ一つの研究授業を通して授業の形態が全職員に浸透していった。少しずつ本校の英語活動のスタイルができつつある。今後も，英語活動の実践を積み重ねながら，本校のスタイルを進化させていきたい。そして，本校の取組を近隣の小・中学校へ情報発信していきたい。

拠 点 校 の 事 業 実 施 報 告 書

拠　点　校　名：浅口市立鴨方東小学校

1　年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

時　期	取　組　内　容
４月	研究主題設定（再検討）　研究計画 研究内容 研究組織
５月	Lesson１ 校内研修会 各専門部・各学年部研究
６月	Lesson２ 研究授業・協議 各専門部・学年部研究 校内研究会（講師招聘）6/13
７月	Lesson３ 研究授業・協議 各専門部・学年部研究 校内研究会（講師招聘）7/4
８月	校内研修会（講師招聘）8/26
９月	Lesson４ 研究授業・協議 各専門部・学年部研究 校内研究会（講師招聘）9/26
１０月	Lesson５ 研究授業・協議 各専門部・学年部研究 校内研究会(浅口市英語活動協議会研修会)10/28
１１月	Lesson６ 研究授業・協議 各専門部・学年部研究 校内研究会（講師招聘）11/13
１２月	Lesson７ 研究授業・協議 各専門部・学年部研究 校内研究会（講師招聘）12/2
１月	Lesson８ 資料整理
２月	Lesson９ 研究のまとめと反省
３月	次年度への方向付け

2　本校における取組の具体的な内容

○教員の指導力の向上のための取組について

【校内研修会】

昨年度に引き続き同じ講師を招聘し，以下のような視点を明らかにした。

①担任が主体となる英語活動について　②段階的に発展させる英語活動の組立て方について

③聞く活動　話す活動　自己表現活動　国際理解活動について　④英語活動の現状について

⑤目標について　⑥指導者の役割について　⑦ＴＴの形態について

【研究授業・校内研究会】

学年ごとに同じ講師を招聘し研究授業を行った。同学年における英語活動の課題をさらに共通理解しやすくした。研究集録を作成した。

○効果的な指導方法の工夫改善について

【単元構成の工夫】

昨年度に引き続き各単元の導入，終末時における学習活動（特に CIR time Impression time の位置付けを見直した。さらに他教科と関連付けた指導を行った。

【学習の流れ（１単位時間）の工夫】

学習の流れ，①Greeting time ②Song time ③Aim time ④Game time ⑤CIR time ⑥Impression -time を，児童の興味・関心に沿って内容や順序を見直した。英語ノートの使い方について検討する中で，タスク活動に対する理解が深まった。

○ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について

ＣＩＲ（国際交流員）及び地域人材（浅口市ローズの会）の活用を積極的に行った。

○児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

国立教育政策研究所の本校に対する質問紙調査（H19,20年度実施）を参照している。

○その他（中学校との連携，ＩＣＴの効果的な活用等）

中教研浅口市部英語研修会へ参加し，小学校，中学校それぞれの取り組みを紹介した。CIR time（国際交流員による出身国等の紹介）において，映像資料をプロジェクターで投影した。

3　本校における取組の成果等

・担任が主体となる英語活動についての共通理解が担任及びCIRともに進んだ。

・児童に無理のない単元構成（段階的に発展させる英語活動）の仕方が明らかになった。

・CIR time の位置付けや，Impression time の活動内容を児童の興味・関心に沿って変えることができた。他教科との関連付けの仕方が明らかになった。

・Song time や Aim time において，歌やチャンツを繰り返し行うことによって，学習する英語表現を自然に身に付けることができた。児童の興味・関心が高まった。

拠点校の事業実施報告書

拠点校名：　岡山県久米郡美咲町立柵原東小学校

１　年間スケジュールに基づいて実施した主な事業経過

月　日	実　施　内　容
4／16	今年度の研究推進計画立案
5／7	クラスルーム・イングリッシュについての研修
5／13	第１回英語情報交換会
5／15	５年生モデル授業と意見交換 外部講師による英語指導方法の実践指導講評
6／10	第２回英語情報交換会
6／13	１・６年生授業公開および授業反省 県総合教育センター指導主事による指導方法の工夫改善についての指導講評
6／26	３・５年生授業公開および授業反省 県総合教育センター指導主事による指導方法の工夫改善についての指導講評
6／27	小学校外国語活動研究会参加（久米南町立弓削小学校）
7月上旬	英語活動の児童アンケート実施と分析
7／8	第３回英語情報交換会　美咲町立中央中学校教諭から「小・中学校をつなぐ英語教育の在り方」についての講話
7／10	２・４年生授業公開および授業反省 県総合教育センター指導主事による指導方法の工夫改善についての指導講評
7／24	年間指導全体計画の検討
8／13	国際交流事業懇談会出席
7月～8月	県総合教育センター等の英語活動研修への参加
8／28	外部講師による英語指導方法の実践指導講評
9／4	６年生授業公開および授業反省 県教育庁指導主事による指導方法の工夫改善についての指導講評
9／9	第４回英語情報交換会
9／10	教材教具の研究開発整備
10／7	第５回英語情報交換会
10／29	平成２０年度英語活動等国際理解活動研究発表会
10／31	拠点校研究会参加（鶴山小学校）
11／5	研究の中間総括
11／11	第６回英語情報交換会
12／9	第７回英語情報交換会
12／10	柵原中学校英語授業参観
12／18	柵原中学校英語授業参観
1／13	第８回英語情報交換会
1／25	拠点校研究会参加（英田小学校）
1／31	全国小学校英語活動実践研究大会参加 先進校視察（京都・第３錦林小学校）
2／10	第９回英語情報交換会
2月下旬	英語活動の児童アンケート実施と分析

2　本校における取組の具体的な内容

○　教員の指導力の向上のための取組について

・毎週水曜日と夏休み･冬休みに校内研修を設定し､理論や授業について研修した。

・岡山県教育庁指導課 西田寛子指導主事及び岡山県総合教育センター 信宮誠指導主事を４回校内研修に招へいし、授業の在り方について指導を受けた。

・名合智子中国短大教授を講師に、クラスルーム・イングリッシュ等英語力を高める研修をした。

・ＡＬＴから英語の発音やアクセントを学ぶ研修をした。

・各種団体等が開催する研修会や先進校の研究会に参加し、英語活動への見識を広げた。

○　効果的な指導方法の工夫改善について

・児童の実態・英語ノートの活用を考え、年間指導計画の見直しを作成した。

・児童が積極的に活動できるよう、１時間の授業について話し合い、全校で取り組んだ。

学習課程を６つの場面でとらえ、カードにして児童に示す。
振り返りの場面の工夫をし、児童の意欲を喚起する。
６つのめあてを意識させ、コミュニケーション能力の向上を図る。

・本校で使用するクラスルーム・イングリッシュを決め、積極的な使用を心がけることとした。

・児童の興味や関心に応える環境づくりとしての校内掲示の工夫をした。

○　ＡＬＴや地域人材等の効果的な活用について

・柵原中学校ＡＬＴとは、面談で授業の流れや役割分担について話し合い効果的な授業作りを工夫しながら進めた。

・英語だけでなく様々な活動を通して児童の実態を把握している地域人材と連携して授業を創造した。

○　児童の興味・関心等学習状況の変容の把握

・前期、後期１回ずつ英語活動に関する児童へのアンケート調査をし、学習状況の変容を把握・分析し、指導に生かした。

○　その他

・毎月第３火曜日に英語活動情報交換会を設定し、郡内の他の小中学校との連携を図るようにした。

・中学校の英語授業を参観させていただき、中学校との連携に努めた。

3　本校における取組の成果等

不安や危惧を抱えながら本校の英語活動は始まった。「何をしたらいいのか。」「どう進めたらいいのだろうか。」「英語は苦手だ。」等不安が大きかった。

２年間の研究を進める中で、私たちの合言葉は「児童が楽しく活動できる。」「教師も楽しむ。」に変わってきている。授業研究や校内研修を重ねることで、担任主導で進める英語活動への抵抗感は薄らいできている。自分で計画し教材研究をし、ＡＬＴと打合せをする中で、英語表現に慣れることができた。担任が英語活動への意欲を高めるに連れて、児童が楽しく英語活動をする場面も増えてきた。そして、児童は、英語活動やＡＬＴとの交流を通して外国の文化や言葉に親しみ、英語活動や国際理解活動への意欲・関心を高めている。平成２１年２月の英語活動への児童アンケートからは、９４％の児童が「英語活動が好き・まあまあ好き」と答えている。また、全児童が外国のことに興

味を持ち、外国のことを知る学習が好きと答えている。このような児童の思いを感じて、担任の英語活動への取組も一層積極的になるというように、担任と児童がお互いに影響し合っているように感じている。児童の他教科での取組や友達とのコミュニケーション・縦のつながりで見られる温かな関わり等でも変容が見られだした。このような中、１１月に開催した学習発表会では、例年にも増して発表内容や表現力に目を見張るものがあり、これも英語活動に取り組んだ成果ではないかと、保護者や地域の方々からも評価をいただいた。

また、この研究を進める中で、教材・教具の必要性も強く感じ、授業に必要な物を作り置くことで、どの学年の学習も進めやすい言語環境を作る事ができた。２年間の拠点校指定により貴重な研究の機会を得ることができ、計画的に研究や実践ができた。

一方、次のことが課題として出て来た。

・英語ノートを使っての指導や他教科との連携の在り方
・教師の英語力
・英語活動を通して高まってきた「伝え合う」力が、さらに他の教科でどのように育っているかを確かめること
・新指導要領への移行期間、本格実施を見据えた外国語活動年間指導計画の研究
・児童が中学校英語にスムーズに入ることが出来るようにする指導法の在り方

などは、今後研究していくべき事と考えている。